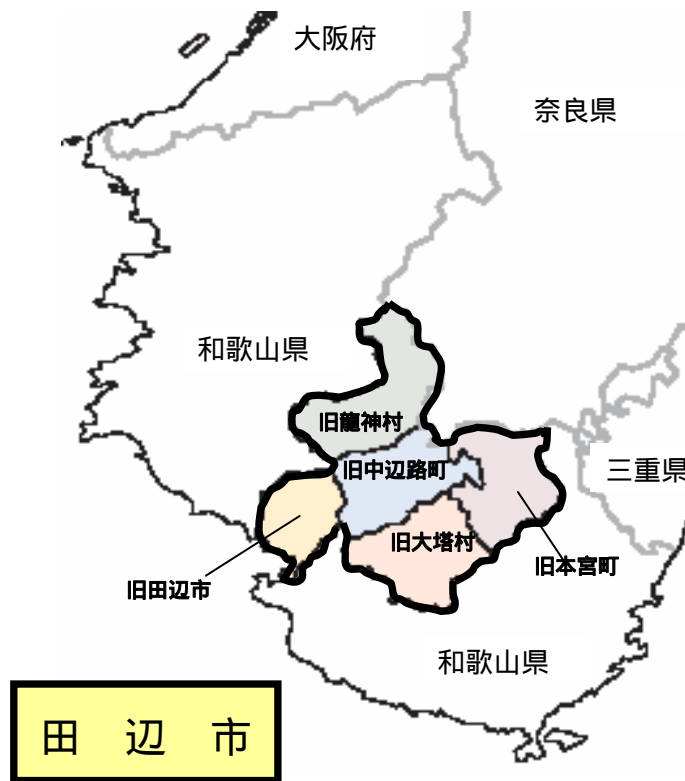


田辺市のひきこもり支援

(窓口開設8年目の報告)



(平成17年5月1日5市町村合併)

平成20年4月～平成21年3月

和歌山県田辺市

目 次

ー 1 . 田辺市における支援ネットワークとひきこもり支援 — 現在までの歩みと課題 —	1
2 . 田辺市ひきこもり相談窓口ピラ	3
. 田辺市ひきこもり検討委員会に参加しての感想	4
. 平成 20 年度 支援の実際	
(1) 相談実績 平成 20 年度	9
(2) 家族会（ほっこり会）	13
(3) 青年自助会実績	14
自助会イベント	16
(4) 啓発活動・視察・実習・問い合わせ	17
(5) 行政局講座(大塔地区)	18
(6) 講演会	27
(7) 田辺市ひきこもり検討委員会 議題 / 活動	39
(8) ひきこもり検討委員会 講義 、	40
(9) 田辺市ひきこもり相談窓口担当者感想	53
. 参考資料	
1 社会的ひきこもり家族の会 ほっこり会 紹介ピラ	54
2 NPO法人 ハートツリー 紹介ピラ	55
3 NPO法人 かたつむりの会 紹介ピラ	57
4 田辺市ひきこもり検討委員会 設置要綱 / 委員構成	58



- 1. 田辺市における支援ネットワークとひきこもり支援

— 現在までの歩みと課題 — 1

- 2. 田辺市ひきこもり相談窓口 紹介ビラ 3



田辺市における支援ネットワークとひきこもり支援

= 現在までの歩みと課題 =

田辺市のひきこもり支援も本年度で 8 年目を迎えました。

行政にひきこもりの相談窓口を専門的に設置し、支援のネットワークを構築し、取り組んできた今までの経過は全国でも先進地的なものでした。

まず、相談窓口に来所した青年のひきこもりの背景を見極めることはもっとも大事な窓口の役割ですが、その際、精神科医の協力がスムーズに得られたのは保健所を初めとするネットワークの力が大きいと考えられますし、今後も地域の精神科医の協力は大変重要で不可欠です。

また、ひきこもりネットワークの NPO 法人との協働は就業体験の場の提供やイベント、講演会への参加や呼びかけなど多岐にわたって公ではできない細やかな支援活動を実施しており、今日の支援の充実はそういった民の活動なくしてはありえません。

今では、全国にもひきこもり支援のネットワークが数多く構築され、国もひきこもりを含めた若者に対する支援やネットワークの構築に力を注ぎ急速に充実されつつありますが、既に市単位で地域と密着したネットワークを構築し、8 年かけて充実させてきた田辺市にとっては今後、新たに国が提唱している広域のネットワークとの兼ね合いがどのようになされれば良いか考える必要が出てきます。

とはいえ、国の委託を受け若者サポートステーションが紀南地方にでき、ひきこもり青年の就業問題が大きく前進したのは喜ばしい限りです。

その中で現在田辺市が抱えるひきこもり支援の課題としては、

相談機関の特性をふまえた整理と役割分担

ひきこもりへの早期対応の為に学校との連携

地域住民の更なるひきこもりへの理解

就学、復学のための支援の構築

また、田辺市だけの課題ではありませんが

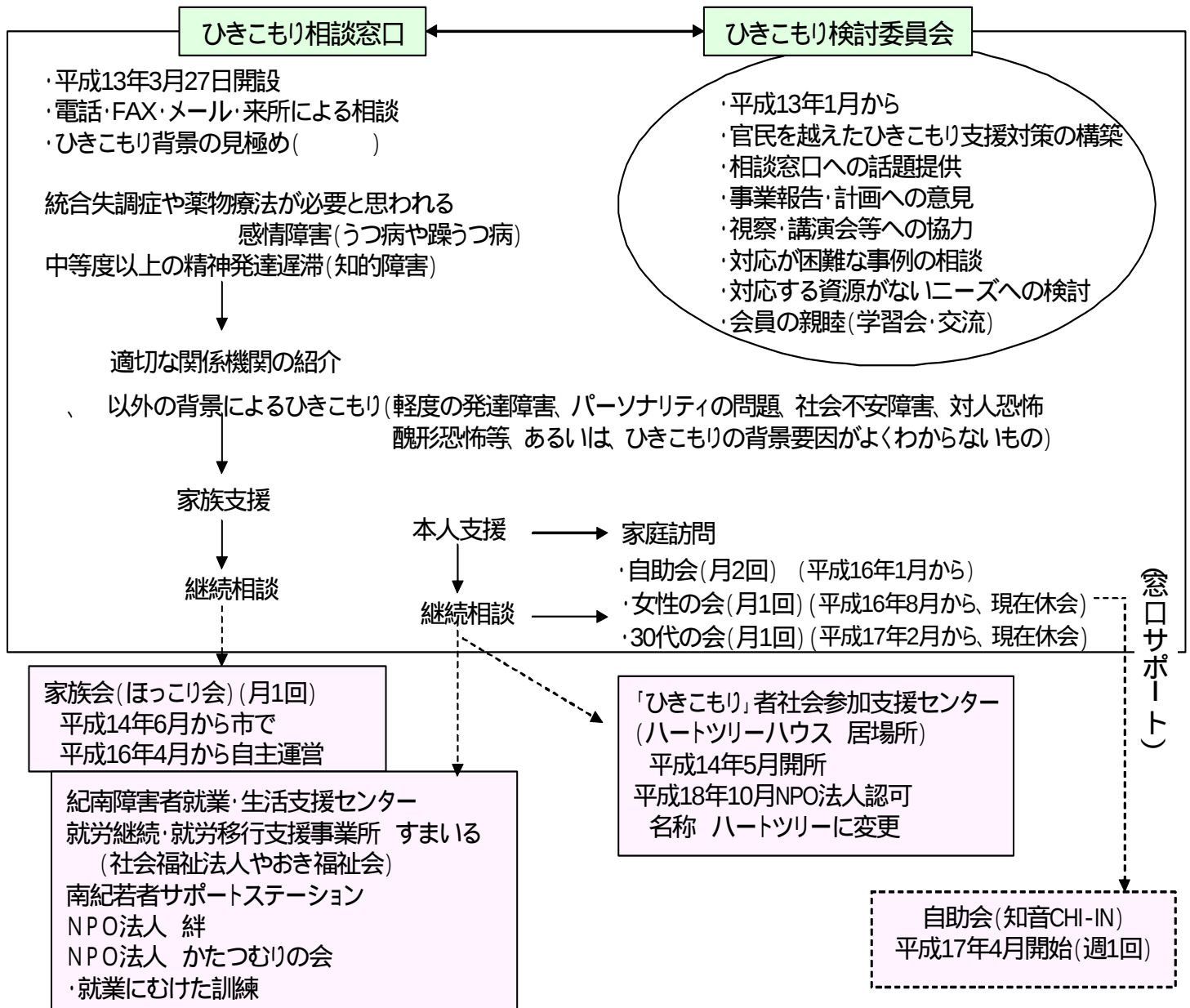
ひきこもりへの特化した支援づくりの国への働きかけ
があげられると思います。

ひきこもりの期間が短いうちに相談機関に結びつき、社会参加ができるようになり、就学、復学、就労へと進んでいく為には、早期に窓口につなげられる様な連携、ひきこもり青年の抱える独自の問題に対応できる支援者の能力ときめ細かい支援が必要となってきます。

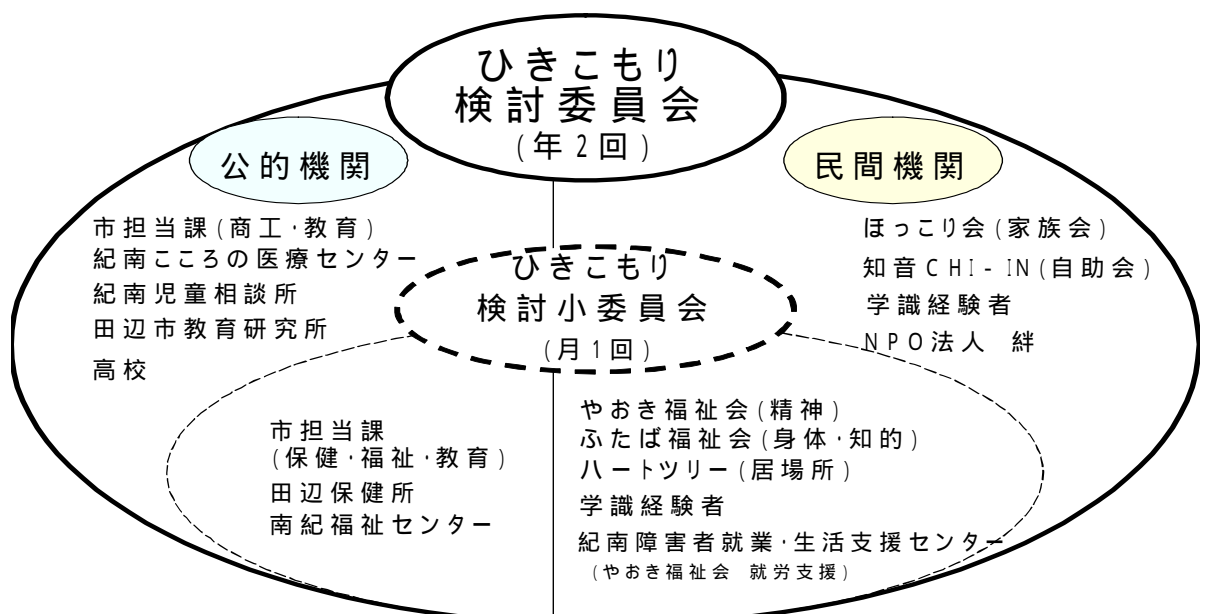
また、いったん社会参加ができて、なかなか継続していくのが難しいという問題も残されています。

くじけそうな時もひき続き支えてくれる仲間のいる場所がある、再度ひきこもっても安心して出直しの出発点となるような支援の場所を提供できる、またそのような気持ちで見守ってくれる地域の人々がより増えるよう活動していく、そのような取り組みは、ひきこもりの若者だけでなく住民全体が生き生き生活できる街づくりにつながるようになるでしょう。

田辺市相談窓口支援の流れ(実線枠外は民間実施)



田辺市ひきこもり支援ネットワーク



ひきこもり相談窓口の紹介

不登校のまま卒業あるいは中退後自宅中心の生活をしている青年、進学あるいは就職したけれど途中でやめて社会参加をしていない青年・・・ご家族や当事者だけで悩んでいませんか？

田辺市健康増進課には専用電話（0739-26-4933）を設置して平日の午前8:30～午後5:30に相談を受けつけています。（担当不在の場合は、後日連絡させていただきます。）

相談を定期的に続けていくうちに徐々に元気を取り戻していく青年が自助グループで活動中です。

問い合わせ先：田辺市健康増進課

TEL：0739-26-4901（平日午前8:30～午後5:30）

TEL FAX：0739-26-4933（ひきこもり相談窓口専用）

HP：<http://www.city.tanabe.lg.jp/kenkou/hikikomori/index.html>

E-Mail：shc@city.tanabe.lg.jp

自 助 会

月2回の集まり
（第1・第3金曜日）

保健所にも「ひきこもり」相談窓口があります。

田辺保健所 TEL：0739-22-1200（代表）（平日午前9:00～午後5:45）

（その他社会資源を紹介します）

家族会

（ほっこり会）

月1回の集まり

- ・ひきこもりの子どもを持つ家族同士の心の交流
- ・家族の対応支援方法
- ・社会的ひきこもりの理解をしてもらうための啓発活動などを行っています

居場所

（NPO法人ハートツリー）

居場所・相談・家庭訪問・イベントなど実施

対象：ひきこもり状態にある青年（15～30歳代までの男女）

入会金：なし

利用料：（1ヶ月）10000円

見学・体験利用は相談の上で

自助グループ

CHI-IN
（知音）

週1回の集まり
（水曜日）

自助会で集まったメンバーが自分たちで様々な活動をしています

・田辺市ひきこもり検討委員会に参加しての感想 4

「ひきこもり検討委員会」新事情などについて 布袋 太三

「ひきこもり」検討委員会のメンバーとして 米川 徳昭

「ひきこもり検討委員感想」

NPO 法人ハートツリースタッフとして」 南 芳樹

「ひきこもり検討委員会に参加して」 横矢 弥生

「1 年を振り返って」 野長瀬 裕樹

「ひきこもり検討委員会 4 年を終えて」 栗田 直嗣

「ひきこもり検討委員になって」 東 知幸

「ひきこもり検討委員会に参加して」 浅井 育子

「ひきこもり検討委員会に参加して」 木下 和臣

「ひきこもり検討委員になって」 山下 寿人

「ひきこもり検討委員会」新事情などについて

田辺市ひきこもり検討委員会 委員長 布袋 太三

草創からの軸であった目良氏の転地は「窓口」と「検討委員会(小)」にある種の転換をもたらした。八面六臂の氏の仕事振りは有り余る功績として確認さるべきではあるが、私は「ポスト目良」の今日の体制は新たな方向性を指し示すものとしては十二分な評価で受け止められていると確信している。実際、「窓口」にたずさわる方々は意見交換の頻度を高め、かつ適宜スーパーバイズを受けながらの組織的対応に徹しているようであるし、月1の小委員会への窓口からの提起する諸課題がより平易で簡明になったことも実感されることである。それに関係する諸機関との折衝などのフットワークにも心なしかやや軽快さが加わった感ありということもあえて特筆したい。

さて、今年度の新事情や諸課題について、未整理だがいくつか列挙してみようと思う。

まず、検討委員会(小)の方の事情についてであるが、どうも気になるのは毎回欠席者が多いということである。年度はじめに開催日時が決定されているから個々のメンバーに不意の仕事が入ったことによるのだと思うが、それにしても欠席者が多すぎる。検討委員会の存在意義が問われていると言うより他ないので、その辺の論議を次年度当初に無理のない程度にはあるがやってみたいと考えている。

それから、いつも言われていることだが、(小)委員会成員間に窓口の相談業務の実態についての理解のバラツキがあり過ぎるのかもしれないということについてである。

窓口としての時々の課題をもう少し精度をあげて成員に明らかにするというのはどうか。そうでないとそれぞれの委員がその出身母体の機関としてどんな関わりができるのかという実践的な論議にはなかなか発展していかない。尤も、窓口のバックアップということからはその他にも多様な課題がいっぱいあることはある。「ひきこもりに関わる言説や支援の現段階」についての情報収集やその分析的とらえ返しとか、当地域の「ひきこもりの掘り起こし」とか、ネットワークの絶えざる見直しと有機的連携の強化に関わることとか、市民への啓発活動に関わることとか、当事者のニーズに応えた社会参加・進路の有り様に関わること等々いろいろある。したがって、委員会では専らそうしたことがらについての論議を中心とした方がいいとも言えないことはないのであるが…。

次に、新事情についてだが、まずは「サポステ」の開始が大きい。ひきこもりからの脱出は至難だが、それでも脱出口付近での取り組みの豊富化はやはり小さくない影響を内外に与え続けていると思う。

それと、厚労省肝いりのいわゆる「センター」設置で言われている不登校を含めた「途切れることのない支援」についてだが、これは学校関係と連携の緻密化を不可避とするわけで、県当局のテコ入れも得て、このことへの効果的な取り組みを早急に始めなければならないと思っている。

また、諸般の状況からネットワークの再構築もそろそろ視野に入れる時期かとも考えている。臨床心理士やスクールカウンセラー、小中高校の教育相談室、関係する新NPO、経営者諸組織や青年諸組織、等々との新たなネットワークづくりをさらに展望してい

きたいものである。

「ひきこもり」検討委員会のメンバーとして

田辺市ひきこもり検討委員会 副委員長 米川 徳昭

4月を前にしたある日、突然、若い女の子に声をかけられた。その人は地元高校で福祉を学び、老人施設に3年前に就職した人で、縁があって、福祉について授業に出席していた、いわば教え子の一人でした。「やっと、正規職員になれたよ」と屈託のない笑顔とともに伝えてくれました。本来、青年は彼女のように、不安や迷いがありながらも、一步步大人になる階段を上り、そして、そこに喜びと感動があります。

ひきこもりの青年を考える時、単純なことから「自分の生きている実感」や「ささやかな感動からの疎外」等、やっぱりひきこもり状態が決してよくないことを彼女の健康的な笑顔からあらためて考えさせられました。

それでは何をなすべきなのか。まだ旅の途中ですが、解決の方程式を提言し、その一翼を担いたいと思います。

「ひきこもり検討委員感想・NPO 法人ハートツリースタッフとして」

田辺市ひきこもり検討委員会 副委員長 南 芳樹

ひきこもり検討委員として3年が過ぎた。

検討委員として、また民間の支援団体 NPO 法人ハートツリーのスタッフからの視点で一年の振り返りをしたい。

まず、平成20年度については、ひきこもりの青年を支援するにあたっていくつかの大きな転機の年になったと考える。

まず、一つ目はハートツリーが運営する、「南紀若者サポートステーション」(厚生労働省からの委託事業)の開所である。「南紀若者サポートステーション」の対象者は15歳～30歳代までの若年無就業者となっており、主に就労に関する相談や支援を行い青年の自立を支援する場所になるのだが、対象となる若者の中には少なからず人間関係や働くことに対する不安・悩みなどを抱えてしんどい思いをしている方も存在し、ひきこもりの青年たちが抱える困難な課題と共通するものがある。今年度の約10ヶ月の中で私が対応した若者も支援を必要としながら、悩み苦しむ青年が多かったように感じる。

これまで、ひきこもりの青年を支援する上での課題の一つであった、力をつけてきた青年の次のステップとして利用することのできる、就労に近い支援を行うことができる選択肢が増えたことは大きなことだと考える。

また、南紀若者サポートステーションを開設するに当たって、対象者の枠が広いこともあって、関係機関との連絡調整が非常に重要な要素となる。そこで、これまでの福祉の分野に留まらず、行政ではハローワークを始め、商工関係、福祉機関や医療機関、一般の事業所や企業にいたる分野の方との協力体制を整える準備が出来始めている。

「南紀若者サポートステーション」自体もまだまだ課題も多く、今後きっちりした体制づく

りや支援のあり方について整理をする必要はあるが、この地域でひきこもりを含む若者の支援の幅が広がっていきけるように活動を続けていきたい。

二つ目に、これまで国レベルで「ひきこもり」は支援の対象という位置づけはされていなかったのが、来年度より「ひきこもり地域支援センター」という名称で支援が行われることとなった。

「ひきこもり地域支援センター」の実際にどのように機能していくか。どのように連携を図っていくのかなど、まだまだ課題も多いが、国が「ひきこもり」を支援の対象に位置づけた経過には、これまでの田辺市や民間の NPO などが行ってきたひきこもり支援が大きな要素になっていると考える。

今後も、ひきこもりの青年が抱える困難な問題を解決し、青年の自立を支援するための活動を続けていきたいと考える。

「ひきこもり検討委員会に参加して」

紀南障害者就業・生活センター 横矢 弥生

臨床心理士の方の話を聞き、ひきこもりというものに対してのアプローチなどはわかってきた感じがします。今の世間では会話が少なく感じメールなどが進み、目に見えないコミュニケーションが多く、読む側独自の判断で捉えられ、同じ建物の中にも会話がないう状況であれば、より一層顔と顔を付き合わせたコミュニケーションを取ることができないように感じました。ひきこもり分野で専門的な知識はもちろん必要ではあり、障害者分野と似通った部分があるようにも感じました。

「1年を振り返って」

社会福祉法人ふたば福祉会 野長瀬 祐樹

今年も1年間ひきこもり検討委員会に参加させていただきました。

仕事の都合上、講演会や会議への出席率が悪く、委員として何も出来なかったというのが第一の感想です。

事務局の方々にはご迷惑をおかけしました。

それに個人的に今年は、自助会など当事者グループの集まりなどにも積極的に参加したいと考えていましたが、それも叶わず残念でした。

ひきこもり当事者の方のなかには、私と近い世代の方も多く、少しでも力になればと考えていたのですが...、今後も形にこだわらず様々な形で関わって行けたらと思います。

ありがとうございました。

「ひきこもり検討委員会4年を終えて」

西牟婁県福祉部 田辺保健所 栗田直嗣

検討委員会に4年間くわえていただき、その4年を振り返る、振り返るほどの中身が自分自身の、業務や活動にあったのだろうか……。そもそも、私自身の職域があまりにも広く(地域的にも、内容的にも)なかなか、絞り込んだ動きがとれない。

しかし、「ひきこもり」対策は保健所の相談事業にも位置づけられており、不登校、発達障害等とも連動しながら取り組む必要は大きい。3年目や4年目は自分自身も全国の取り組みを見て歩いたが、根本的な保障や整備が乏しく、今後、国、都道府県の積極的な具体的取り組みがより一層必要であること痛感した。

教育・就労・福祉などの横の繋がりと、年齢に応じた縦の繋がりが一枚の布を織り込むがごとく、動いて行かなければならぬ。

「ひきこもり検討委員になって」

紀南こころの医療センター 東 知幸

平成 20 年 4 月から紀南こころの医療センターで勤務しています臨床心理士の東です。田辺市ひきこもり検討委員に選出していただき、この一年間大委員会や小委員会に出席してきました。私が不登校やひきこもりに関心を持ち始めたのは10数年前、大学生の頃です。大学生のときはメンタルフレンドというひきこもり型不登校援助の実践および研究をしていました。その経験を小委員会の場でお話する機会もいただきました。未曾有の大不況により勤労を目指すひきこもり青年を取り巻く状況は決してよくないですが、委員会でひきこもり青年の心理的側面に関する助言をしたり、紀南こころの医療センターでひきこもり青年のカウンセリングをすることでご協力させていただこうと考えています。頭で理解した知識を、こころで理解するためには事例検討が不可欠です。可能な限りスーパーヴィジョン等をお引き受けしたいと思います。平成 21 年度も継続して委員を勤めさせていただきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

「ひきこもり検討委員会に参加して」

臨床心理士 浅井 育子

今年度よりオブザーバーとして委員会に参加させていただきました。毎月の小委員会において、さまざまな機関の方が、「ひきこもり青年とその家族をいかに支えていくか」というひとつのテーマに向かって意見を交換される光景に、田辺市の支援の手厚さと地域の方々の熱意を感じ、驚くと同時にその場に参加できることをとても光栄に思います。ありがとうございました。

田辺市は、窓口からはじまり、ハートツリーから「わかしお」まで、ひきこもりの方が家か

ら外に出て行くまでの、ひとつひとつのステップに応じた施設が揃っていると思います。この豊富な資源をいかし、今後はさらにネットワークづくりを重視していくことで、より全面的な援助につながるのではと感じています。

私がこれまで不登校、ひきこもりの方々の援助に携わってきて強く感じたことは、一人で抱え込まずに全体で見ていくことの効果と必要性です。そして、その人個人の課題やしんどさの原因などを考えていくとともに、その人の人生を大きな視点で捉え、流れの中で見ていくことの大切さも痛感しました。家族支援や、地域にどうかかわっていくか、などについても検討していければ、「田辺市全体で彼らを支える」という体制がさらに充実していくのではないかと感じます。ネットワークのひとつとして、微力ながらも、何か少しでもお役に立てることがあればという思いでこれからも参加させていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

「ひきこもり検討委員会に参加して」

学校教育課 木下和臣

ひきこもり検討委員会に2年間参加させて頂きました。それぞれの立場で支援活動をしている方々には、いつもながら頭の下がる思いでした。ひきこもりの問題は不登校問題と関わりが深く、検討委員会での取組は、私たちが不登校問題を考える上で大変参考になりました。特に、臨床心理士東知幸先生の講義では、不登校・ひきこもりの増加の原因から支援に必要なこと等、具体的に教えて頂き大変参考になりました。これらのことを学校における取組にいかしてゆきたいと思います。

ひきこもり検討委員になって

生涯学習課 山下寿人

田辺市のひきこもり検討委員になって、はや2年となりました。検討委員に選ばれた時には、学識経験者や精神科医の先生方にまじって、私など何ができるだろうと不安でしたが、この2年間、毎月行われる小委員会はもちろんのこと、ひきこもりに関する研修会や講演会に参加させていただくにつれて、ひきこもりへの理解や認識を深めてきたつもりです。昨年の10月に行われた、田辺市青年ネットワーク主催の「第3回フットサル大会」では、ハートツリーの利用者が、会場付近で出店し、一般青年との交流を図りました。今後は、フットサル大会だけでなく、田辺青年ネット主催の様々なイベントに参加協力のお声をかけていきたいと考えています。



平成 20 年度 支援の実際

(1) . 相談実績 平成 20 年度	・ ・ ・ ・ ・ 9
(2) . 家族会 （ほっこり会）	・ ・ ・ ・ ・ 13
(3) . 青年自助会実績	・ ・ ・ ・ ・ 14
自助会イベント	・ ・ ・ ・ ・ 16
(4) . 啓発活動・視察・実習・問い合わせ	・ ・ ・ ・ ・ 17
(5) . 行政局講座(大塔地区)	・ ・ ・ ・ ・ 18
(6) . 講演会	
第 1 部「ひきこもりのあなたへ」	・ ・ ・ ・ ・ 27
- 明日への回復 10 ステップ -	
講師：中垣内 正和 氏	
第 2 部「厚生労働省におけるひきこもり対策について」	
講師：高倉 恵子 氏	・ ・ ・ ・ ・ 33
(7) . 田辺市ひきこもり検討委員会 議題 / 活動	・ ・ ・ ・ ・ 39
(8) . ひきこもり検討小委員会 講義	・ ・ ・ ・ ・ 40
ひきこもり検討小委員会 講義	・ ・ ・ ・ ・ 46
(9) . 田辺市ひきこもり窓口担当者感想	・ ・ ・ ・ ・ 53



(1) 相談実績 平成20年度

相談窓口開設以降平成21年3月末までに、359 家族 378 件の相談がありました。

(内、平成19年度までに 336 家族 353 件)

○ 年度別相談件数

	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20
実件数	44	79	89	105	86	80	50	50
延べ件数	138	337	481	1097	1090	968	643	541

平成20 年4月～平成21年3月までの状況

○ 月別相談延べ件数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	上半期合計	
電話	8	4	9	12	16	14	63	
来 所	23	29	31	37	24	30	174	
メール	0	2	1	1	1	0	5	
訪 問	1	5	4	3	2	5	20	
合 計	32	40	45	53	43	49	262	
	10月	11月	12月	1 月	2 月	3 月	下半期合計	総合計
電話	25	14	6	6	10	16	77	140
来 所	33	24	24	27	22	23	153	327
メール	1	0	0	0	0	0	1	6
訪 問	6	4	5	12	14	7	48	68
合 計	65	42	35	45	46	46	279	541

医師による相談(3件含む)

○ 相談実件数

	実 件 数	
	初 回	継 続
電話	14	6
来 所	10	18
メール	1	0
訪 問	0	1
合 計	25	25
	50	

○ 相談者(初回)

母	父	両親	本人	兄弟姉妹	祖父母	親戚	関係者	その他
13	0	0	4	2	2	3	1	2
計	2件が重複。以下は内訳							
27	2件が重複。母・本人(2)							

その他は母の友人 関係者は民生委員

○ 相談者(延べ)

母	父	両親	本人	兄弟姉妹	祖父母	親戚	関係者	その他
192	22	5	367	2	5	4	1	3
計	60件が重複。以下は内訳							
601	本人、母(44) 本人、両親(5) 本人、父(10) 母・母の友人(1)							

○ 年代別男女別実件数(50件中)

	～10代	10代	20代	30代	40代	年齢不明	計	%
男	0	7	13	4	2	2	28	56
女	0	2	8	10	0	1	21	42
性別不明	0	0	0	1	0	0	1	2
計	0	9	21	15	2	3	50	
%	0	15	49	29	2	5		

○ 居住別(50件中)

市内	29	58%
市外	16	32%
不明	5	10%
計	50	

○ 相談結果(50件中)

継続	25	50%
終了	7	14%
紹介	4	8%
その他	14	28%
計	50	

終了
紹介
その他

- ・その他(4)
- ・ゆめふるへ<田辺市障害児・者相談支援センター>(1)
- ・家族会(2) ・紀南若者サポートステーションへ(1)
- ・本人、家族から相談のみ(7)
- ・親戚からの相談のみ(5) ・関係者からの相談のみ(1)
- ・相談者不明相談のみ(1)

相談継続について

○ 継続分類(25件中)

統合失調症や薬物療法が必要と 思われる感情障害	3
中等度以上の精神遅滞 、 以外の背景によるひきこもり	0
軽度発達(知的)	4
その他	18
計	25

○ 継続状況(重複あり)

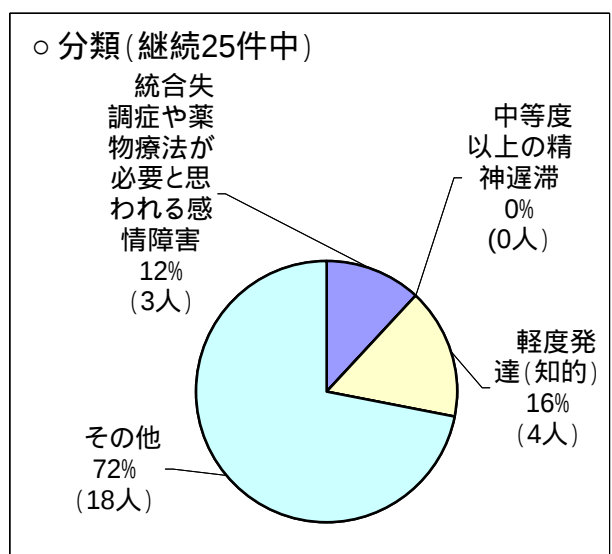
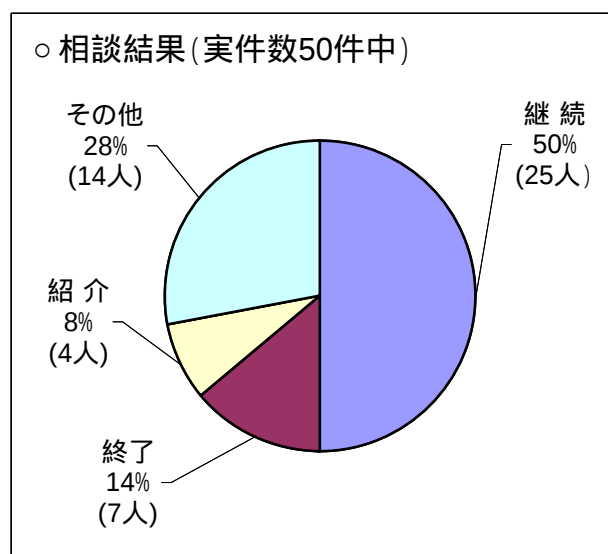
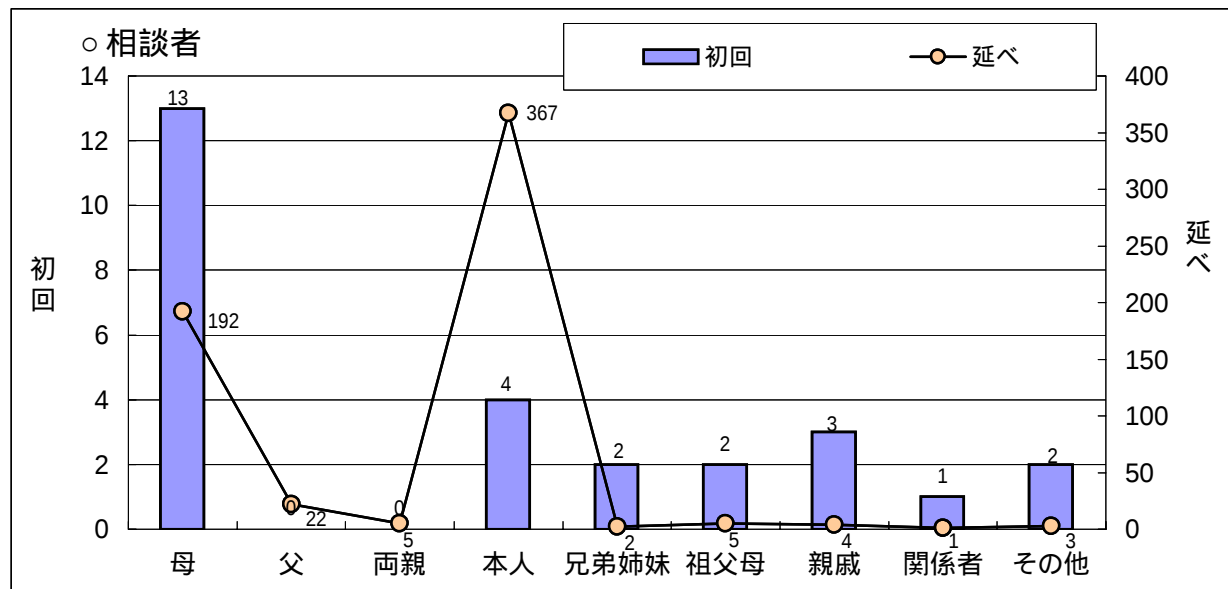
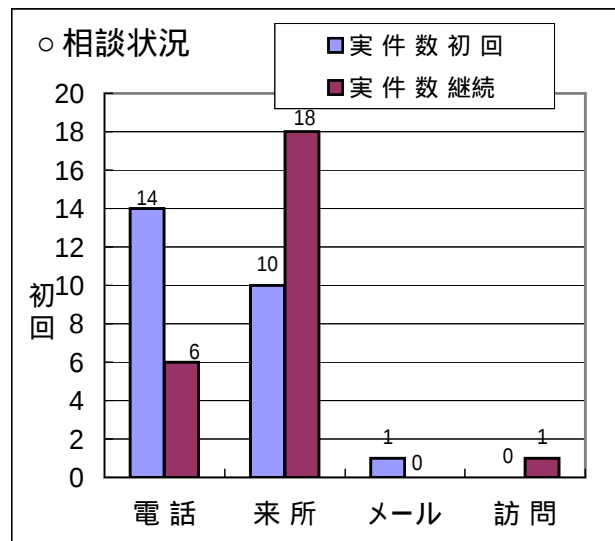
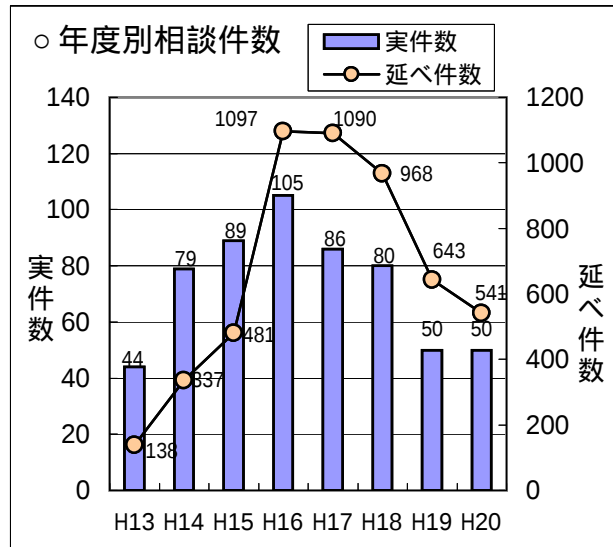
自助会	6
家族会	9
医療	12
ハート	4
就労	5
就労訓練	3
学校	2
訪問	5
相談のみ	8

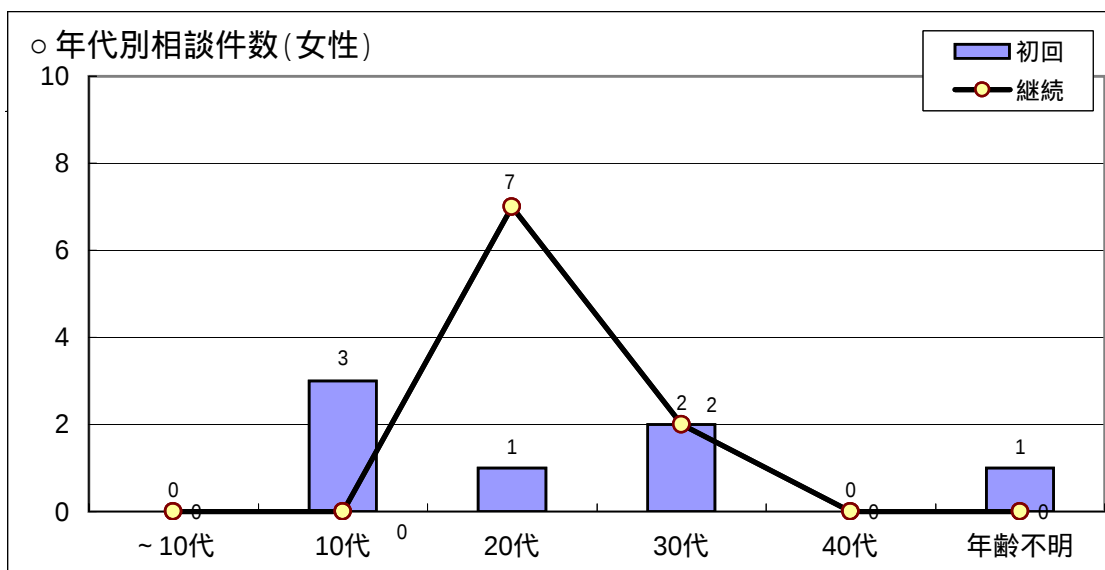
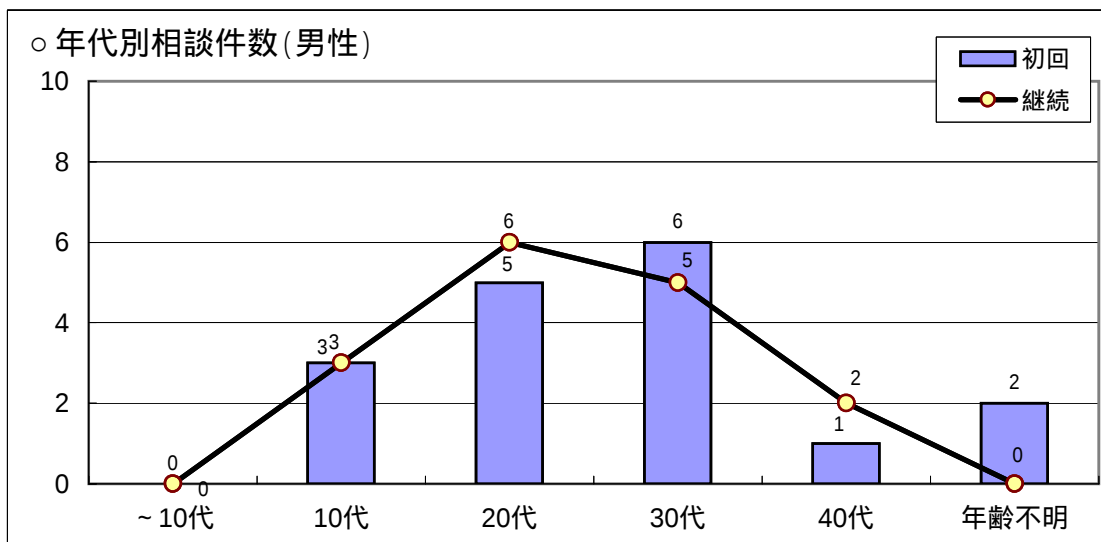
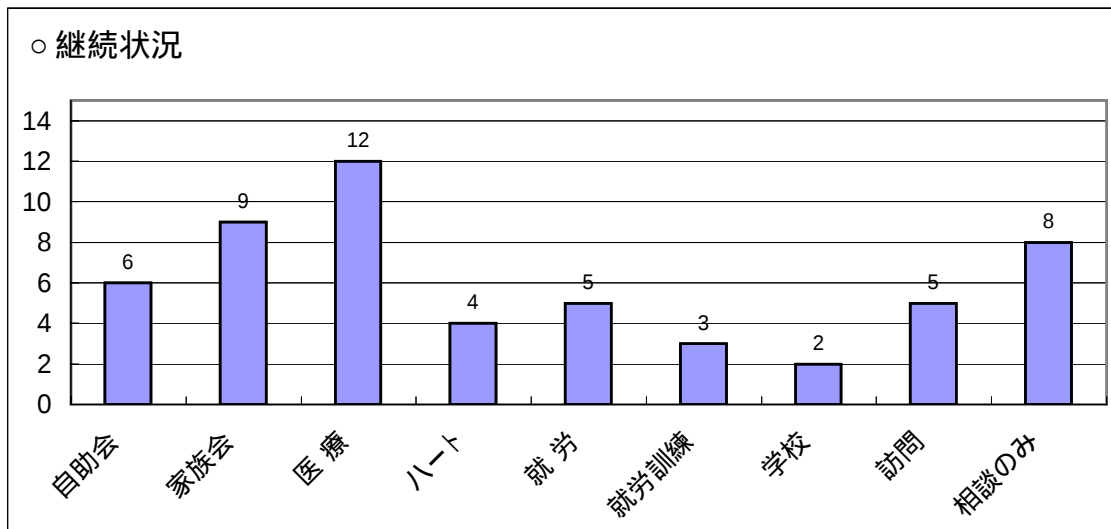
○ 居住別(25件中)

市内	17	68%
市外	8	32%
計	25	

○ 年代別男女別件数(25件中)

	～10代	10代	20代	30代	40代	年齢不明	計
男	0	3	6	5	2	0	16
女	0	0	7	2	0	0	9
性別不明	0	0	0	0	0	0	0
計	0	3	13	7	2	0	25





(2) 家族会

ほっこり会(紀南地方ひきこもり家族の会)実績

(平成16年4月より自主運営)

実 施 日	内 容	出 席 者				実数	参加家族数	対象家族数
		父	母	その他関係者	窓口			
H20.4.8 午前	話し合い	3	6	0	2	11	7	14
H20.5.20 午前	話し合い	3	6	0	2	11	7	
H20.6.17 午前	話し合い	3	4	1	2	10	6	
H20.7.8 午前	話し合い	2	8	0	2	12	8	
H20.8.19 午前	窓口不参加	2	4	0	2	8	7	
H20.9.9 午前	話し合い	1	7	0	2	10	7	
H20.10.14 午前	話し合い	2	4	0	2	8	4	
H20.11.11 午前	話し合い	0	3	0	2	5	3	
H20.12.9 午前	話し合い	2	6	1	2	11	7	
H21.1.13 午前	話し合い	2	6	1	2	11	7	
H21.2.10 午前	話し合い	2	5	1	2	10	6	
H21.3.10 午前	NPO法人 かたつむりの会 施設見学	2	5	2	2	11	7	
平 均		2	5	1	2	10	6	14

家族の声(家族として思うこと。ほっこり会に参加して。)

子どもからのメッセージを1つずつ受けとめてゆくことの大切さ、メッセージは形を変えて親に伝わるところがあるので、その「意味」がわからない時、気づかない時は、専門家に聞くことが大切と感じます。

子どもが元気になる前に親が元気をいただく場としてありがたいと思っております。

ほっこり会での家族の方々の話を聞いて、自分が悩んでいる事と同じような事で皆さんが悩んでいるといろんな話を聞かせてもらい、皆さんからパワーをもらい力をもらったと思っています。心の支えになったと思っています。

親自身が元気になれる気がしますが、子どもはなかなか変化がなくて親もあせることが多いです。

(3) 自助会実績(月2回の集まり)

実施日	内 容	出席者	関係者	対象数	実施日	内 容	出席者	関係者	対象数
H20.4.4	話し合い	3	2	12	H20.10.3	ゲーム大会	2	0	12
H20.4.18	話し合い	1	2		H20.10.17	遠足(新庄公園)	3	0	
H20.5.2	話し合い	2	2		H20.11.7	作業(切り絵貼り) 話し合い	2	0	
H20.5.16	話し合い	3	1		H20.11.21	手作り年賀状作り	3	0	
H20.6.6	話し合い	2	0		H20.12.5		0	0	
H20.6.20	話し合い	1	0		H20.12.19	クリスマス会・ 立体カード作り	2	0	
H20.7.4	話し合い	2	0		H21.1.16	初詣	3	0	
H20.7.18	話し合い	1	0		H21.2.6	ゲーム・立体カード作り	3	0	
H20.8.1		0	0		H21.2.20	コミュニケーションカード・ 話し合い	2	0	
H20.9.5	話し合い	1	0		H21.3.6	調理実習(お好み焼き)	3	0	
H20.9.19		0	0						

○知音 (自主運営、参加要請の場合に参加)

実施日	内 容	関係者	参加者	実施日	内 容	関係者	参加者
H20.4.2	近況について	0	1	H20.10.1			
H20.4.9	話し合い	0	2	H20.10.8			
H20.4.16	話し合い	0	2	H20.10.15			
H20.4.23				H20.10.22	話し合い	0	2
H20.4.30	話し合い	0	2	H20.11.5			
H20.5.7				H20.11.12			
H20.5.21				H20.11.19			
H20.7.2	話し合い	0	1	H20.11.26	話し合い	0	2
H20.7.23				H20.12.17			
H20.7.30				H21.1.7			
H20.8.13				H21.1.14			
H20.8.20				H21.1.21			
H20.8.27				H21.1.28			
H20.9.10				H21.2.18			
H20.9.17				H21.2.25			
H20.9.24				H21.3.4			
				H21.3.11			
				H21.3.18			
				H21.3.25			

○ 自助会イベント

日 程 ・ 場 所	内 容	参 加 者
10月3日(金曜日) 田辺市民 総合センター 『ゲーム大会』	ゲーム大会をしました。自助会メンバーは2名参加してくれました。 人生ゲーム。トランプ(ばば抜き・じじ抜き・ポーカー・神経衰弱など)しました。	自助会メンバー 2名 ひきこもり相談窓口 2名
10月17日(金曜日) 新庄公園 『遠足』	新庄公園へ遠足に行きました。自助会メンバーは3名参加してくれました。 コスモスが綺麗に咲いているところも通り、散歩しました。曇りで歩くのには丁度良い気候でしたが、休憩していると少し、肌寒い感じでした。ウォーキングも気分転換になったのではないのでしょうか。 美術館にも行きました。野長瀬 挽花展が開催されていました。芸術の秋、絵画を見て、芸術に触れることも出来ました。	 自助会メンバー 3名 ひきこもり相談窓口 2名
11月21日(金曜日) 田辺市民 総合センター 『手作り年賀状づくり』	年賀状づくりをしました。自助会メンバーは3名参加してくれました。 ゆったり、お茶を飲みながらスタンプや千代紙を使って思い思いの素敵な年賀状を作りました。 誰に出すのか楽しみです。	自助会メンバー 3名 ひきこもり相談窓口 1名
12月19日(金曜日) 田辺市民 総合センター 『クリスマス会・立体カード作り』	クリスマス会、立体カード作りをしました。自助会メンバーは2名参加してくれました。 人数が少なかったため、ゲームなども予定していたのですが、メンバーさんの希望もあり、立体カード作りをしました。クリスマスカード、新年のカードなどを作りました。それぞれ、素敵なカードが出来ました。 お茶を飲みながら、今年の自助会のイベントの話など、今年を振り返り話をしました。	自助会メンバー 2名 ひきこもり相談窓口 2名
1月16日(金曜日) 蟻通神社・闘鶏神社 『初詣』	徒歩で、蟻通神社と闘鶏神社に初詣に行ってきました。自助会メンバーは2名参加してくれました。 行きと帰りで道を変えて、歩いて行きました。ちょっとした運動にもなったのではないかと思います。	 自助会メンバー 2名 ひきこもり相談窓口 2名
3月6日(金曜日) 調理実習 『お好み焼き』	お好み焼きと炊き込みご飯でおにぎりを作りました。自助会メンバーは3名参加してくれました。 分担して調理し、おいしいお好み焼きとおにぎりが出来上がりました。	 自助会メンバー 3名 ひきこもり相談窓口 3名

(4) 啓発活動・視察・実習・問い合わせ

○啓発活動

日 付	内 容 『 テーマ 』
H.19.8.26	南紀高等学校 教育対策研修会

○視察

豊橋市教育委員会	1 人
篠山市市議会	9 人
千葉県柏市 NPO法人キャリアデザイン研究所	1 人

○問い合わせ

岡山精神保健福祉センター	山口県精神保健福祉センター
--------------	---------------

○その他(取材)

未来工学研究所 情報通信センター

(5) 行政局講座(大塔)

1. 参加者 39 名(ひきこもり検討委員・事務局 12 名含む)
2. 日 時 平成 20 年 11 月 16 日(日) 10 時 00 分～12 時 00 分
3. 場 所 大塔行政局 大塔健康プラザ
4. 内 容
 - 1 開会あいさつ
 - 2 大塔中学校の課題への取り組み
 - 3 田辺市のひきこもり支援の実態
 - 4 ひきこもりと病気・障害について
 - 5 ネットワークを支えている関係機関から
5. 配布資料
 - レジュメ
 - ひきこもりと病気・障害について
 - NPO法人ハートツリー活動内容
 - 市民講座―「ひきこもりの理解と支援のために」
 - ハートツリー案内 等
 - 南紀若者サポートステーションリーフレット
 - ひきこもり相談窓口の紹介
 - ひきこもり講演会の案内

6. 内容

【あいさつ】(大塔行政局住民福祉課長)

【大塔中学校の課題への取り組み】(大塔中学校長)

地元の中学校の「生徒の実態について」地元のみなさんへお話するのは難しい点があります。でも、学校の基本姿勢として事実を大切にしたいと考えており、お話をします。

本校の課題は二つあると思っています。

一つは生徒指導上の問題

二つは不登校(一定日数学校を欠席している)生徒の問題です。

この課題、特に不登校については民生児童委員さんと話し合いをし、協力をして頂いているところです。

不登校とは、年間30日以上欠席の生徒の内、病気以外の理由で欠席している場合を言います。全国で、3%から4%、1クラスに1～2人くらいの割合になります。さらに平成13年度に不登校児童生徒がいる学校は、全体の60%と言われています。逆に40%の学校には不登校生がいないということになります。また、その割合は学校の大小に関わらないと言われています。そこが、校長として学校運営の「みそ」だと思っています。

本校には、平均以上の不登校生がいます。原因は分かりません。

文部科学省が、過去に不登校の経験がある本人に、その後、4～5年経ってアンケート

をとっている資料があります。平成5年くらいに不登校であった生徒に平成10,11年くらいにアンケートをとっています。その資料の中に「原因」の記述があります。友人関係が45%、学業不振28%、教師との関係が21%という結果でした、少し古いですが、傾向としては変わっていないのではないかと思います。

本校の課題の生徒指導上の課題と不登校の課題は、出方は違うが根本的には、原因は同じではないかと思います。

学校の取り組みですが、ストレスを柔らかくする必要があると考えました。学級、学校の仲間づくり、何でも話し合える人間関係をつくるのが大切と考えました。

そのため不登校課題を持つ生徒が登校した時、少人数の人間関係から始める必要を感じ別に「少人数教室」をやり繰りして作りました。朝3時間教員がついています。現在生徒は1~2名です。

また、本校のような1学年1クラスの学校は人間関係が固定化しており、クラス替えで関係を築き直すことができません。小規模だと、高校入学が人間関係発展の機会になると期待するところもあります。

親子関係もシビアな面もあり、学校としても手を入れる必要性を感じています。少しずつ職員が複数で家庭への取り組みもしています。

資料は、文部科学省が出しているものです。「学校における取組」ということで、不登校とまらないための魅力ある学校づくり、不登校児童生徒に対するきめ細かく柔軟な対応ということが書かれています。はもっと人間関係作りが必要、学級作りが必要というようなことが書かれています。はもっと細やかに、柔軟に対応が必要だということが書かれています。不登校に陥っている子どもには、柔軟に、少しずつ進めていくというようなことが書かれています。一部、本校の取り組みと違うところもありますが、参考になる資料だと思いました。

【田辺市のひきこもり支援の実態】(相談窓口担当)

〔取り組みの経過〕

〔田辺市相談窓口支援の流れ〕

〔田辺市ひきこもり支援ネットワーク〕

〔相談件数〕

〔相談実件数〕

〔相談実績〕

〔継続状況〕

〔継続分類〕

〔自助会実績〕

〔地域の一人として〕

パワーポイントで説明。

Q . 大塔行政局管内の実態というのはどうですか。

A . 田辺の本庁に相談に来られている方は1件ありますが、実態調査のようなものは出来ていけませんので数字は把握できていません。

Q . 窓口への相談は、1件のようですが、大塔管内でもひきこもりではないかと思う人は、

1人、2人ではないのではないかと思います。民生としても、行政としてもストレートに言いにくいところがあると思います。どうもっていくべきなのかと思います。

A . 色んなところでPRされ、だんだんひきこもりへの理解が広がってきているのではないかと思います。

それからどうしていったらよいかというのは課題です。いろんなところで広がってきた支援、NPO法人ハートツリー、田辺保健所などがあります。まずは、一般の方に出来れば目に付くところでPRしていただき、気軽に相談できるようにしていければと思います。

不登校生徒が、やがて環境が変わり、高校へ行き、さらにひきこもるということも考えられます。ひきこもっている人は、1人や2人ではないというのは、どの地域もそうだと思います。

田辺市の相談窓口や、他のところでも何らかの形で相談に来てもらえたらと思います。保健所やハートツリーもあります。最初は、本人は来られないと思います。家族に進めて頂いて、窓口等を利用していただければと思います。

Q . 相談の件数は、H16、H17 の山が高くて、その後下がってきています。良くなってきたのか、事務局はどう考えられていますか。

A . ひきこもりが減っているとは考えていません。むしろ、増えているのではないかと思います。

H13 に窓口が出来て、どこかへ相談に行きたいという方が、出てこられたのだと思います。

その後、もう一步踏み出せなくて、長期化している難しいケースも残っているのではないかと思います。田辺市以外に相談に行かれている方もいると思います。

最初は、家族が来られるケースがほとんどですが、家族が、子ども以外にもストレスがかかってきたり、一人親で家計を支えていたり余裕がない親というのも増えているということもあるのではないかと思います。

【ひきこもりと病気・障害について】(ひきこもり検討委員 宮本 聡医師)

南紀福祉センターで勤務している精神科医です。H13 からひきこもり検討委員会に関わらせてもらっています。

先ほどの、相談件数の棒グラフについては、以前委員会でも質問させてもらったことがあるのですが、ひきこもりが減っているわけではないと思います。

実態調査というのは、難しいと思います。病気であれば、病院に受診して、医療機関である程度数字は分かります。ひきこもりが何人いるかは、病院、関係機関に行くことがないことが多いので、実際どれくらいいるかは分かりません。

厚生労働省は、概ねの数字を挙げていますが、実際の数は分かりません。

本質的には、思春期の課題が、年齢的には大人になっても続いているということもあります。

学校は、1年で30日以上生徒が何人かは分かります。義務教育を終わって、地域に参加していくと、正式には分かりません。

10年～20年ひきこもっている方もおられると思います。実態調査が、田辺市としてよいのかというのは、人権問題も関係してくるので、やってやれないことはないと思います

が、難しいと思います。

病気であれば、早期発見、早くトレーニング、治療、療育したり等に繋げていけます。検診などもあり、全員で数を抑え、フォローすることが出来ます。

ひきこもりは、調査して、行政として何が出来るかというところもあると思います。

深いレベルで、難しいと思います。家の人自身が、風通しが悪くなっています。とりあえず、1度、話だけでも聞きに言ってもらえないか、風通しを少し良くすることが大切です。本人は、苦しいと窓口の説明でありましたが、保護者も苦しいのです。7年間関わらせてもらって思いました。

〔ひきこもり支援の見極め〕

ひきこもりは、病名ではありません。学校で言うところの不登校です。

統合失調症や薬物療法が必要と思われる感情障害(うつ病や躁うつ病)、中等度以上の精神遅滞(知的障害)の場合は、適切な機関に紹介ということになり、その他の背景によるものが対象になります。

〔社会的ひきこもりの定義〕

厚生労働省が出している社会的ひきこもりの定義というのは、斉藤環先生が言われたものです。

概ね、六ヶ月間以上、社会参加せず、精神障害が第1の原因でないものです。不登校で言う年間30日が、6ヶ月、理由が病気というのが精神障害に変わる。ぱくっとしたとらえ方で言うそうなると思います。

社会参加というのは、親密な人間関係も含まれているということも書かれています。コンビニに買い物に行ける、メール交換をしているというので良いのかという疑問があります。好きな本を買うためにインターネットをすることで社会と繋がっているのかというもあります。

原因は分かりません。いろんなことが絡み合っています。本人が望んで、社会参加しないという場合もあると思います。しかし、多くの人が思春期くらいの気持ちを引きずりながら苦しんでいるのだと思います。

診断名ではないというのがありますが、ひきこもり支援の見極めのところから出てきた、統合失調症は、以前は、精神分裂病と言われたもので、慢性的な意欲の低下というのがあります。100人に1人くらいに発症する病気です。早期発見、早期治療が必要です。原則、思っているより治癒力が高く、治療すると良くなっていく病気です。社会復帰プログラムもあります。うつ病や躁うつ病もあります。病気を見落とさずに、利用できるサービスを使うというのも必要です。

中には、障害のために家にこもっている知的障害の方もいます。人口の2~3%いるといわれています。今は、適切な支援、特別支援学級での教育等が充実し、普通高校に通っている方もいますし、はまゆう支援学校などもあります。教育、福祉の中でもシステムが出来ています。

まれに、10年間ひきこもっていて、知的と分かるということもあります。知的に遅れていて、働けない。緊張があるということもあります。適応力は、20代であっても、精神年齢は10歳ということもあるので、萎縮してしまうのは当たり前です。

病気を見落とさないということが大切になってきます。病気等の場合は、福祉ネット

ワーク、行政のサービス等を利用することが出来ます。

〔社会的ひきこもりの特徴〕

色んなところで言われているひきこもりの特徴です。

1970年代後半から増加していると言われています。一部は、前からあって、在宅で生活している人もあったのだと思います。それが、この時期から増えてきたのだと思います。

不登校との関連性は高いと考えられています。以前の不登校は、経済的な理由が多かったのだと思いますが、一定の年代までは、連動しているところもあると思います。社会の苦しさが見れているのかもしれませんが。

全国で数十万から百万人と推定されていますが、あくまでも推定です。

比較的男性の方が多いといわれていますが、男性のほうが、社会的に期待されることが多く、ハードルが高いことと関連しているのかもしれませんが。

長期化に至る場合があるというのは、半年を目安にしていますが、1年続けば、2年となることもあります。不登校も小5くらいから不登校で、中学校になっても行けなくてというのと同じように長期化していくことがあります。

長期化とともに、精神病ではないが、精神症状が出て、治療の対象になることもあります。家庭内暴力などがあり、家族だけでは支えるのが難しくなるケースもあります。

長期化のパターンには、共通点が多いと言われています。外へ気持ちも向きにくく、当事者、家族のコミュニケーションが硬直化し、家族間の風通しが悪くなるということがあったり、家族が、地域から孤立したりすることがあるのではないかと思います。

長期化すると、自力で社会参加がむずかしくなることも多いです。

〔よく見られる精神症状〕

不登校は、状態で、精神症状ではありません。不登校くらいから医療にかかっているケースもあります。

自分が臭っているのではないかと思ったり、みんなが見ているのではないかと思ったり、姿勢が気になって外に出られなかったりなど、対人恐怖があります。近所の目が気になったり、初めての人と合うのが緊張するのは、当然だと思います。少し薬を使って緊張を和らげることは出来ます。

被害関係念慮は、布団の中などに包まって、常に狙われている気がする。世間への迷惑を考えて悶々としていることがあります。薬で和らげることが出来ます。

強迫症状は、強く迫るということで、自分でも馬鹿らしいと思っていても辞められない、考えがグルグル回っています。例えば、トイレに行って手を洗って拭いても、このタオルが汚れているのではないかと思って、別のタオルで拭いても綺麗になっていないのではないかと思います。1~2回だといいいのですが、1~2時間洗面台から離れられないこともあります。自分でも馬鹿らしいと思っても、自分の手が不潔ではないかと思って辞められないというのがあります。

心気症状というのは、自分の体がどこか悪いのではないかと思うことです。

症状ではありませんが、昼夜逆転になることも良くあります。

退行は、家の人としか関係がもてないことが多いので、うらみつらみになって、あの

時、こうしてくれたらということが出てくることもあります。依存できる対象のときは、ベタツしたりします。思うようにいかないと暴力に繋がったりします。そのときは、家族は、脱出の方法を考える必要もあります。最終、沈静の医療行為をする場合もあります。

抑うつ気分というのは、晴れやかにこもっている人はいないと思うので良くあることだと思います。

希死念慮・自殺企図は、死んでしまったほうが良い、自殺未遂を繰り返すなどです。

いろんな状態が混じっています。病院の治療、2次的に苦しんでいるような場合は、こちら辺では、紀南こころの医療センターへ受診していただけたらと思います。

Q . 横の関係はあるが、縦の関係が少ないように思います。将来の展望というのが、分かりにくいということもあるのではないかと思います。

A . 不登校も、情報が縦に繋がらないこともあります。

卒業したら、学校としての問題解決になるという面もあります。生徒自体の問題解決にはなっていません。縦の指導、個人に合わせた指導が大切だと思います。

高校は、不登校で、単位が取れないと、まずは休学して、その後も出てこれないと退学ということになっていきます。

それから後、どう支援していくかが大切です。田辺市の相談窓口、ハートツリー、保健所への相談など、少しずつ、窓が開かれていけばよいと思います。

Q . 子どもさんだけに問題でなく、家庭にも問題があるということも聞いたことがあるのですが。親も子どももカウンセリングして、1 から勉強して、接し方も変わってよくなったという話を聞いたことがあります。家で、ひきこもっていると悩み事相談などで聞いて、こころの医療センターや田辺市の相談に一度行ってみませんかといってもいかないうケースがあります。地域だと知っている人がいるから行きにくいというものもあるのかと思います

A . 親が原因であるとか単純な問題ではないと思います。

いろいろな要因があると思います。

一つとしては、母子関係、親子関係、価値観が影響しないというわけではないと思いますが、そののみが原因という、ひきこもりの家族は、肩身の狭い思いをします。

保護者も、子供のひきこもりが、6ヶ月以上、1～2年になってくると、気持ちも内向的になるので、家族のカウンセリングも有効です。

近頃の良し悪しというものもあると思います。近いからゆえに行きにくいというものもあると思います。今は、児童を診ていますが、遠方から来てくれる人も多いです。

7、8年前に、なかった、相談窓口が出来たのは、画期的な事です。全国から見れば、うらやましいということだと思います。市民としては、行きにくい面もあると思います。住民は、市、県、民間、どこからでも相談できる場所が出来ればよいと思います。

そういう窓口を作るといふ動きも出てきているのではないかと思います。

【ネットワークを支えている関係機関から】

〔田辺保健所より〕

保健所で、精神保健福祉相談員をしています。こころの健康全般を専門的にしています。

H17 より、検討小委員会に参加させてもらっています。

どこの地域でも、人との関係が持ちにくく、生きづらさを持っている人が相談の窓口を訪れます。県の保健所は、4ヶ所あります。

紀北地方では、大阪と地元の接点多いです。新設校も多く。子育てで孤立したり、溶け込めなかったり、父、母のしんどさと難しさがありました。保育士や学校の先生と話しながら、この分野にも興味を持ちました。

湯浅では、県の教育事務所も入っていたので、学校の先生や福祉関係の方もいました。17年ぶりに田辺に帰ってきて、田辺市の取り組みは画期的だと思いました。

保健所では、こころの健康相談もしています。4町も含めて、広域になります。出てきにくいところへは、自宅へ伺います。自宅では、しんどいので、行政局の窓口でとか、公民館でとか、プライバシーを守った上で、楽な環境で相談できればと思っています。

年間400件～500件の相談があります。そのうち、医師の相談が述べ100件前後です。医師の相談は、初回が多いので、90件くらいが実件数になります。

保健師、相談員が受ける相談は、370件～380件くらいです。関係機関が増えてきたこともあり、相談が分散しているということもあると思います。

不登校、ひきこもりは今のところ、延べ11例～12例です。田辺市と一緒に訪問等している事例が1～2事例あります。旧市街地という事例が多いです。

保健所で力を入れているのは、社会的ひきこもりと言われる手前のところから関わることです。高校では、保健所は、文化祭等を通じて繋がりががあります。養護教諭から、保健所に相談がある場合もあります。

青年期の心ということで、いくつかの高校の先生を窓口、学校の先生との学習会等をする試みをしています。途切れ途切れの関係にならないように、学校だけでなく、社会資源を紹介していけたらと思います。

担任、養護の先生等は、苦しんでいます。相談窓口があるというのを、積極的に出かけて行き、一緒に考えていけたらという取り組みを始めています。

また、地域の民生委員さんが、抱え込んでしまわないように、名前を伏せてでも良いので、保健所や窓口相談を持ってくるようなことをしたいと思います。

本人が出てきにくいというのは課題です。名前は出せないが、地域にこんな人がいてという状況を教えていただき、一緒にアプローチの方法を考えていけたらと思います。

訪問も、普通の格好で行きます。守秘義務も課せられています。きっかけをいただければと思います。

これから、民生、学校等、縦と横の関係をどう作っていくかが課題だと思います。

地域が難しかったら、県は、BigIで、相談を受けています、電話相談でも良いです。ワンクッション置きながら、他の地域にでも良いので、とにかく相談に行ってもらえればと思います。和歌山まで行くと、エルシティオや麦の里がやっているフリースクールもあります。匿名でも良いので、一緒に考えていけたらと思っています。

〔ハートツリーより〕

ハートツリーは、ひきこもり青年の居場所です。

< 利用対象者 >

ひきこもり状態にある 15 歳 ~ 30 歳代の青年です。

< 利用者数 >

定期的に通所している方が、9 名です。定期的にくられないという方で、登録している方が、2 名です。利用はまだ決めていないが、体験入所として、イベントなどに参加している方が、2 名です。訪問指導継続者が 1 名です。

その他、イベント等への参加は、随時、関係機関に呼びかけています。自助会の方も来られています。

今年度は、WAM 事業もあります。8 名が参加され、うち 3 名がハートメンバーです。

< ハートツリーの活動内容 >

「居場所」の提供

家庭以外で安心して過ごせる居場所として、過ごし方は個人の自由で、開所時間内は、いつ来てもいいし、いつ帰ってもいいし、何をしてもいいし、何をしなくてもいいということになっています。また、自己決定の場(自分を決して否定されることがない環境)です。出会いの場として、人やモノ(経験)、世界、いろんな考え方があってというのがあります。

○ 相談活動

本人・家族・その他からの相談を実施しています。

希望によっては、訪問活動や情報の提供なども行っています。また、相談内容によっては、医療機関、福祉ネットワークなど関係機関へのコーディネートもします。

○ レクリエーション活動

月 1 回のミーティングでメンバー同士が来月の予定を決定しています。楽しい体験の中で、自己肯定感を高めるということで、楽しいことを一緒にしたりしています。

○ 自主製品のクッキー・パウンドケーキ作り

自分たちで最初から作った製品を販売するところまでしています。作業に参加したメンバーには工賃を支給しています。月平均 2,000 円くらいになります。全部の作業に参加して、最高で 6,492 円になる方もいます。作業の日だけ来る方もいますが、それも良いと思っています。

WAM(独立行政法人福祉医療機構)からの助成

今年度だけですが、WAM から助成事業を受けて「ひきこもり青年の自立・就労事業」を実施しています。申し込みは、随時、受け付けています。

南紀若者サポートステーション(平成 20 年 8 月開所)

「はじめの一步」を応援しています。利用対象は、15 歳 ~ 34 歳までの若者で、ニート・社会的ひきこもり・飛び石フリーター・若年無業者等を対象ということになります。働いていない若者対象ということになります。

キャリアコンサルタントや臨床心理士が相談をお受けします。就労に向けての

心構えということで、スキルアップの相談、支援をしています。

学校を卒業して、就業しなくても、生きていくうえでは、どこか社会とつながっていて欲しいと思います。田辺市の相談窓口や、保健所やサポートステーションなど、どこの相談窓口でも良いので、行っていただければと思います。

就労に向けてということで、この窓口が来やすければ、来ていただければ、相談を受けるところは、連携しながら、一人を大切にしていきたいと思います。

子どもにパンフレットを入れといたら、6年ぶりに電話をくれたという方もいます。本人も悩んで、どこかで手を差し伸べて欲しい、本人も悩んでいます。こういうところがあると伝えていただきたいと思います。皆さんに伝えてくれれば、田辺市の連携する組織があります。

Q . 地域の実態を把握されているのは、民生委員さんだと思います。民生委員として、どういう対応をすればよいのか、どういう相談の仕方が良いのでしょうか。

A . 民生委員さんに、相談に来ていただけないか進めていただくということですが、まず、民生委員さんから状況を聞かせていただいて、方法を一緒に考えさせていただくということも出来ます。その後、親が来ていただいて、訪問ということもさせてもらっています。家庭への声かけをお願いできたらと思います。

それぞれの方によって違うと思います。模範解答というのはいないです。

Q . 南紀若者サポートステーションの利用者は、15歳～34歳になっていますが、これは厚生労働省が出している数字だと思いますが、それ以上の大人は受けていただけないのでしょうか。

A . 厚生労働省の若年者の枠でということになっています。ただし、実際は、34歳過ぎたから切るというのは、無理なところもあります。

地域若者サポートステーションは、30代までにしてほしいという要望があり、枠を広げようという動きがあります。

ひきこもりとついていると行きにくいということもあると思います。行政に知られたくないというのもあると思います。サポートステーションを入り口にしていただければ、サポートステーションで対応できない部分は、連携していけます。ひきこもり相談窓口に福祉、行政、医療に産業が重なれば、色んな連携が出来るのだと思います。

最後の就労の部分を受け持つことになりますが、入り口にも利用していただければ、他のところへ紹介ということも出来ます。

田辺には、相談するところがいっぱいあります。

南紀サポートステーションには、ハローワークの方もネットワークとして入っています。企業も入っています。システムも出来つつあります。

○ ひきこもり、不登校について、民生委員としては、勉強になりました。

縦の線は、大事であると思います。

成功事例も紹介していただければよかったと思います。

(6)―第1部 ひきこもり支援啓発講演会

主催：和歌山県精神保健福祉センター

共催：田辺市

後援：田辺市ひきこもり検討委員会

演題：「ひきこもりのあなたへ」―明日への回復10ステップ―

講師：中垣内 正和 氏

日時：平成21年1月18日

13:30～14:45

参加者：111人(一般及び関係者)

【講演内容】

はじめに

以前に依存症などの治療を行っていた頃には、不登校はその後どうなるのだろうと考えていた。2000年の柏崎市の女子監禁事件を機に親の会を発足させることになり、そのコーディネーターとなった。

ひきこもり外来はゼロからのスタートで不安だったが、とりあえず開始した。その方法として、アルコール依存、摂食障害など依存症治療のノウハウが役に立った。

現在までのひきこもり外来への当事者の受診は、159名である。親も本人も、何とかなる場所さえあれば、自分から参加したいと考えている。ひきこもりから開放されたいと思っている人たちに希望を持ってほしいと思う。皆で力を合わせて取り組めば、必ずひきこもりから脱出できることを、医療現場で実感しているからである。ひきこもりの取り組みを行っている地域には、ひきこもり家族間の悲劇的な事件が起こりにくいということを強調したい。労働力の期待はその次といえる。今日は、医者が真正面からひきこもり問題に取り組めばどうなるかということ、本人たちが出てくるポイントがあることなどについてお話ししたい。

資料にそって

男女比

男性7割、女性3割となるが、女性のほうが多様な生き方を許されることから数が少ないと思われる。

ことばの混乱

2000年頃は「社会的ひきこもり」といわれ、無病理性が多いとされた。次に「ひきこもり状態」という、統合失調症も含めた呼び方が提案された。他人との交流がある人は「ニート」とも呼ばれ、労働政策の対象となった。しかし、どの言葉によっても「ひきこもり」の本質や深刻さが伝わってこない。その原因は、もっとも深刻な人たちは、外からもっとも見えにくいという点にあると思われる。それが「ひきこもり」の特徴である。本質的であるという点から「ひきこもり」という言葉を使いたい。

「社会的」ひきこもりとは

1. 他者との交流がない 2. 就学、就労、訓練がない 3. 統合失調症等の重度の精神

疾患・中等度以上の知的障害がない 4・自家、自室中心の孤立した生活 5・6ヶ月以上続いているということで定義された。しかし、この定義は、心の病がほとんどないという印象を与えること、未発病の統合失調症やパーソナリティ障害を見分けられないという点で中途半端といえる。

ひきこもりの原因

ひきこもり外来を訪れた 159 名の原因を分析すると、対人不安やうつ状態などの診断を 70～80%につけることができる。病理性のないひきこもりは自力で脱出してしまうのであるが、来院者には軽い安定剤が効くケースが多いことを示している。家庭から見ると、父親不在、母子密着タイプが多いので、ここをどうやって変えるかという家族強化のポイントが見えてくる。受験競争やいじめなど学校教育の問題性を示す不登校からのひきこもりは半数をしめる。新卒不採用や30代などでリストラに遭い、挫折を味わってひきこもるケースも多い。経済情勢や受験競争が厳しさを増して、若者を取り巻く状況は悪化しているので、ひきこもりは増えることはあっても、減ることはないと予測される。

ひきこもりの心理

先ほども言ったように、対人不安、うつ傾向、人格の偏りなどから「出たいが出られない」状況がつづく。うつ傾向はマイナス思考につながる。ひきこもりの人は完全癖が強くて、少しだめだと全てだめと考えてしまう。現在の動きがないので過去の記憶にこだわって親を責める。全てを否定してしまう。生活の範囲をしだいに狭めていく現象はよく観察される。

ひきこもりに限らず、精神疾患は思春期から 22 歳くらいに好発するが、周囲のサポートが大変重要となる。受験年代でもある、この時期の精神的フォローによって、精神疾患化のリスクは半減する(岡崎裕士ら)というデータがあるが、ひきこもりについても同様のことがいえる。

ひきこもり年数

ひきこもり外来のデータでは、ひきこもり年数のピークは2年～3年にあった。KHJ 親の会の調査の結果では、平均ひきこもり期間が10年をこえ、平均年齢は30歳をこえた。1年たったらひきこもり期間も1年増え、平均年齢も1歳あがる現象はこの問題の解決の難しさを表している。ひきこもり外来の平均ひきこもり期間は6年である。取り組みが進むと早期介入が進むようになり、取り組む効果も出やすくなる。10年以上のひきこもりでも脱出可能であるが、現在は、とくに長期化の問題性が危惧される。小学校から10年間以上ひきこもっているケースなどは社会性の未発達が目立ち、対応に工夫がいる。発達障害が見落とされているケースも目立つ。長期化して、心身ともに不活発になるケースも目立つ。事件化と並んで、重大なのが「栄養障害」である。極端な偏食や運動不足が重なって、栄養状態の悪化と心身の衰弱が進行する。幻聴が聞こえたり、暴力行為に走ったりすることもある。家族にとってはもっとも重荷となる事態といえる。ひきこもりの人は「若いから大丈夫」と思われがちだが、栄養不良がつづくとなら脳の萎縮など身体疾患の発生、精神状態の不安定化などの影響が出る。骨折しやすくなることもある。「健康なひきこもり」には、体力が維持されているし、精神活動も活発でPCを見たり、新聞を読んだりしている。17年間も周囲との交流を断った35歳男性は、自転車外出を繰り返したために身体疾患などの問題は

なく、任意入院して治療プログラムに活発に取り組んでいる。

ひきこもり外来の159名の中には15年以上のひきこもりは10%をしめた。各機関が協力して介入しなかったら悲劇的な事件につながったと予測されたケースは10例であった。相談に行けば問題解決につながる機関やNPOが存在することが大切といえる。

ステップ ひきこもるやり方ではどうにもならないことに気づいた

ひきこもる方法ではどうにもならないと本人が気づくためにはどうするか。親が外へ動いて圧力が弱まると、親への依存に気づいて本人も動けるようになる。事態を変えるためにはまず親が動かねばならない。親がまじめすぎて生活を楽しめないような場合には、一緒に楽しむように工夫する。買い物などの外出をともにする。そうして居場所など支援の場所へとつなげていく。

ステップ 重圧から開放されてくつろいだ

親も子も被害者意識があり、「なぜこんな事になったんだ」とお互いに思うことがあるが、父親がもう少し本人を支える側にまわるべきだと思い始めた時に(回心)、子供が変わりはじめた(和解)18年ひきこもりのケースがある。親との「和解」が進めば本人は出てくる。親の期待と本人の現実があまりにもずれると悲劇が起こる。母親が洗濯や炊事などを全て行って「母親依存」を強めながら、経済的には自立を求めること、これは誤りといえる。親の方に力があるのだから、まず親が動く事態が好転する。

親たちの誤り

親たちは自分のあり方を見直さず、「昭和の価値観」にこだわり、過剰な期待をかけたり、病院まかせ、NPO まかせ、お金まかせにすることがある。強制的に収容しても、長期間ひきこもった場合は、結局自分の家や部屋や親が恋しくなって逃げ出そうとする。それを無理に引き止めようとして事件が起こったりする。第3者とともに取り組むことは大切だが、親も考えを変えることが必要なので、親の会、家族教室が必要となる。

無理に外に出すと、抑えられていた統合失調症が発病する場合がある。やはりできるだけ早期の医師の見立てや心理テストが必要である。長い間ひきこもっていて出てきたのだからと、親や周囲が一気に挽回と圧力をかけると、刺激が過剰となって発病するのである。表に出ることによって境界型のパーソナリティ障害がはっきりする場合もある。うまくいくNPOなどは必ず医師とのネットワークを持っている。そういうネットワークが広がると50万人ともいわれるひきこもる若者が、やがて家から出て、自分の望む動き方をして、労働力になり、家庭を持つことすら可能になるといえる。

親の変わり方

近すぎる距離は遠ざけ、遠すぎる距離は近づける。近すぎる母と子は距離を遠ざけ、父親が近づくようにする。経済成長の時代は、父親の不在、母親の過剰が問題にされていた。経済成長を経て到達したのは、地域の家どうしがバラバラで地域崩壊が進み、家族もバラバラにホテル家族のようになって、皆が孤立してメディア、パソコンなどにしがみついた世界であった。したがって、皆が力を合わせる方向へ意図的に進むことがきわめて治療的になる。

集まって支えあい、自分ひとりだけでないと感じ、モデリング(まねぶこと)をして、やがて社会へ参加する、そんな共同の動き、共生社会(伊藤進)への動きが必要である。

ステップ 居場所、フリースペースへ参加する

この時には、少しだけ勇気がいる。軽くいざなうこと。座っているだけでもいいから、とりあえず参加してみる。最初はリラックスできないが、しだいに慣れていく。皆が同じ悩みを持っていることに気づく。ひきこもったことで「大切な時間と社会的つながりを喪った経験」を共有でき、忘れることができる。喪失感にさいなまれると、うつ病になりやすいが、その時には少量の抗うつ剤を使うとよい。

ステップ 医療やNPOなどを利用した

ひきこもり外来へ来所したうちの 70%は親といっしょの受診である。人権に配慮することは大切である。精神科医にはあまり関与しない方がいいという、人権侵害を恐れる考え方が強い。しかし、心身の不健康なままに長期間放っておくことが、より人権侵害である。基本的人権、生存権、生活権というもっと大きな人権侵害を放置することは避けたい。身体疾患をがまんしていることは、案外気づかれにくい。

臨床診断名

外来受診の 159 名を診断名別に分けると、1 番は社会不安障害で 40%、その次がうつ関連で 30%、次に強迫性障害や PTSD など「他の不安障害」、パーソナリティ障害もかなりの数となる、また、何事にも無感動になったアパシー、そして知的障害、妄想状態と続く、アスペルガー障害が意外に少ないのは、成人になってパーソナリティ障害とされることが多かったため(加藤敏)である。過剰にアスペルガーの診断をして、ひきこもりの原因を生物学的原因に帰してしまうことは避けたい。ひきこもることによって二次的にコミュニケーション力が低下した場合には、プログラムによってみるみる回復する。

ステップ 居場所に出てくることによって、もはや孤独ではない事に気づく

居場所でいろんな人と出会い、仲間になり、ゲームやスポーツを楽しみ、マイナス思考や完全主義にはアドバイスを受ける。もはや孤独ではないことに気づく。普通の若者であり、ありのままでよいと気づく。

ステップ 学びたい学びを開始した

高校中退の場合には高校を卒業したいという願望を持っている。高卒認定資格や自動車免許資格などを勧めている。ケースワーカーが社会との橋渡し役として、さまざまな機関と連携して社会参加の方向を探っている。

1990 年代にひきこもりについて調査した時(斉藤環)は不登校がほとんどだったという。2008 年に東京都で調査した時(高津雄介)は不登校と就職後の比率は半々であった。ひきこもり外来のデータでは、学業の中途放棄は半分、4 分の 1 は卒後無業(卒後に進学就労しない・できない)、残りの 4 分の 1 は就労後の社会生活からひきこもりへ移行している。

ステップ 異性とのおしゃべりやデートを楽しんだ

異性は生きがい、生きる張り合いになるので、居場所などを通じた交流を可能にしている。メル友はいっぱいいるようだ。うれしそうにデートの話をする青年もいる。女性のうち2名は結婚し、一名は婚約まで行った。社会不安障害の「大人しい」女性は好かれるのではないか。男性の結婚例はまだない。非正社員、フリーターが増加して、社会全体に結婚しにくい風潮があるので、この点は大きな問題ではない。

ステップ ボランティアやバイトで身体を動かした

外へ出るようになると、親には「毎日外へ出てほしい、隣の息子と同じようにしてほしい」とあせる傾向がある。しかし、長期間ひきこもっていると体力が落ちているので、すぐに人並みは無理であり、強制すると再度のひきこもりの原因にもなる。まずウォーキングなどで体力をつくるのが大切になる。一気に働こうとして怪我をすることもある。人に慣れ、体力をつけ、いろんなモデリングを見て、最初は、軽く奉仕活動、ボランティアから、そしてバイトへと進めて、しだいに働く喜びにつなげていく。

表 11

今言ったような取り組みを複合的に行っていく、ひきこもり外来からの社会参加状況は就学が 30%、就労が 50%、就学就労をあわせると約 60%となった。超長期、40 歳代以上、知的能力の低い人などは、まず居場所でひとに慣れることが大切となる。

社会参加の内訳

社会参加は、就学・就労・結婚に分けられる。就学は高卒認定資格、自動車学校、大学、専門学校、ヘルパー講座など各種資格などであるが、体力があるなら介護福祉士は向いているのではないかと。就労もバイト、パート、社員、家業を手伝うなどいろいろある。正社員も案外いる。就学のほうが最初の登竜門としてよさそうに見えるが、就労が多いのはその手軽さからであろう。

表 9

ひきこもり年数と社会参加の関係であるが、一般に5年以内は社会参加率が高く心配いらない。15 年を過ぎるとかなり低くなる。社会参加は、「完全な社会的自立」のことではない。親と一緒に生活しながら一回でもバイト、就労、学校にチャレンジしたことを、社会参加とみなす。これは厚生労働省の基準と同じである。現代では親と一緒に生活するのは当たり前となり、親元にいることを「パラサイト」(寄生虫)と揶揄することは誤りといえる。

ステップ 社会参加し生きる実感を得た

メディアやネットによる刺激は、脳の視聴覚の経験にはなるが、真に人間らしい汗水流しての実感のある体験からはかけ離れている。人間性の回復には、生きる実感のある体験が何より大切である。「普通の若者をしているなあ」と思えばよい。親はわが子への要求水準を下げるのが大事で、どうにかやれていればよい位の気持ちで見守ること。

ステップ 自分の苦しい経験をいまだ苦しんでいる人に伝えた

若者は、単なる家の子でなく社会の子であるが、日本は若者福祉も少なく、そのことに気づきにくい社会である。とくに長期化・高齢化したひきこもりを親だけで担うには限界がある。また、問題を抱える側も、ひとりだけでも家族だけでも生きていけないことや、仲間の力、共同体の力に気づく必要がある。ひきこもりから脱したら、自分の経験を苦しみ悩んでいるひとたちに伝えとよい。自分の経験が他人の力となることは大きな喜びになる。自分がこの社会の一員であることを実感しながら生きていきたいものだ。

最後に「ひきこもっている当事者への呼びかけの文」を読んで終わりたい。「大丈夫、いつからでもスタートできる。人生に無駄なことなんてない。あせることはない。ちょっとだけ勇気を出して、君たちのための集まりや居場所へおいでよ。待ってるよ。」大人たちも当事者たちも、自分たちの経験を伝え合って共同社会、共生社会をつくる。今は、新しい時代がはじまる陣痛の時代であり、ひきこもりの若者たちはそれを敏感に感じている。当事者も親も支援者も医療福祉も、協働してこの問題に取り組んでいこう。(了)

(6)— 第 2 部 ひきこもり支援啓発講演会

主催 : 和歌山県精神保健福祉センター

共催 : 田辺市

後援 : 田辺市ひきこもり検討委員会

演題 : 「厚生労働省におけるひきこもり対策について」

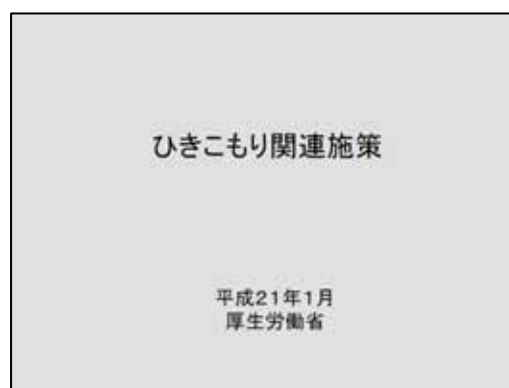
講師 : 高倉 恵子 氏

日時 : 平成 21 年 1 月 18 日

14:55 ~ 16:00

参加者: 111 人(一般及び関係者)

【講演内容】



厚生労働省ひきこもり関連施策推進チームメンバー

(平成20年7月3日現在)

- | | |
|----------------------------------|-------------------------|
| ○社会・援護局総務課指導係長 | 青木 一生(内線2816) |
| ○社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課心の対策づくり対策官 | 成重竜一郎(内線3054) |
| | 発達障害対策専門官 日詰 正文(内線3004) |
| ○雇用均等・児童家庭局家庭福祉課児童福祉専門官 | 前河 桜(内線7884) |
| ○職業能力開発局育成支援課キャリア形成支援室室長補佐 | 渡部 昌平(内線5372) |
| ○健康局総務課保健指導室保健指導専門官 | 劔物 祐子(内線2398) |

(電話)03- 5253- 1111(代表)

「ひきこもり」について

「ひきこもり」とは

- 「ひきこもり」は単一の疾患や障害の概念ではなく、生物学的要因、心理的要因、社会的要因などが背景になる状態。
- 自宅に引きこもって社会参加しない、長期間にわたって生活上の選択肢が狭められた精神的健康の問題。

＊出典：「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン（厚生労働科学研究事業「地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究」）

「ひきこもり」の状態にある者の推計

推計

○地域疫学調査（面接調査）による推計

「ひきこもり」経験率 1.18%（20歳～49歳）

「ひきこもり」存在率 0.67% 約32万世帯

※本研究における「ひきこもり」の定義：仕事や学校にゆかず、かつ家族以外の
人との交流をほとんどせず、6ヶ月以上続けて自宅に引きこもっている状態。

出典：三宅由子、地域疫学調査による「ひきこもり」の実態調査。

平成16年度厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業

-2-

ひきこもり地域支援センター（仮称）（新規事業）〔社会・援護局総務課〕

【現状・課題】

（セーフティネット支援対策等事業費補助金210億円の内数）

「社会的ひきこもり」に関する相談・援助状況実態調査 等より

- ・ひきこもりに特化した相談窓口がないため、ひきこもり本人又は家族が相談に十分に結びついていないのではないか。
- ・ひきこもりの支援は長期間に及ぶことから、各段階に応じた対応が必要となるが、各関係機関のネットワークが十分でないのではないか。
- ・ひきこもり各関係機関における専門職員の知識や支援技術が十分でないのではないか。
- ・ひきこもり本人又は家族に必要な情報が届いていないのではないか。

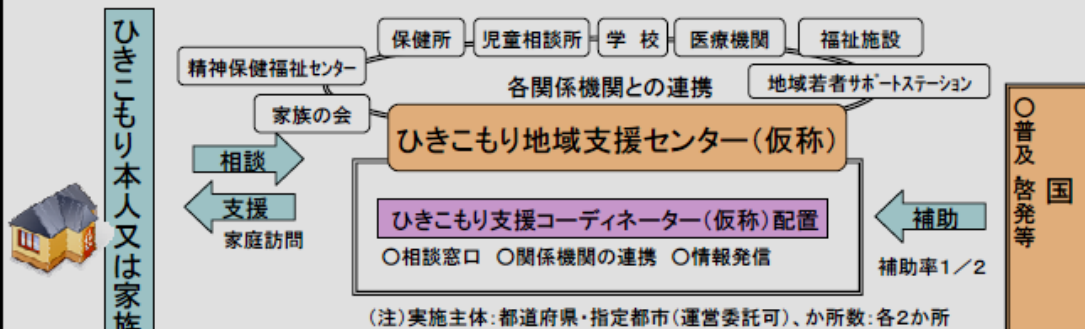
といった問題が提起されている。

※ ひきこもりの状態にある者の推計 約32万世帯（「こころの健康科学研究事業」の地域疫学調査による推計）

【事業概要】

児童期から成人期までの各ライフステージに対応する一貫した支援

都道府県・指定都市に自立支援対策を推進するための核となる「ひきこもり地域支援センター」（仮称）を設置し、
①第一次相談機能としての役割を担う。②各関係機関のネットワークの連携強化を図る。③地域のひきこもり対策
にとって必要な情報を広く提供する。



-3-

ひきこもりに関する既存施策(平成21年度予算案)	
施策の概要・平成21年度予算案など	担当部局・課室
・精神保健福祉センター・保健所関連(精神保健福祉センター特定相談等事業費 94百万円の内数等) 精神保健に関する相談窓口における「ひきこもり」の相談。 ・思春期精神保健対策研修会関連(PTSD・思春期精神保健対策事業費 26百万円の内数) 「ひきこもり」を含む思春期精神保健の専門家の養成。 ・厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業(1,616百万円の内数) 「思春期のひきこもりをもたらす精神疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」(平成19年度～21年度) →思春期ひきこもりに対する評価・治療・援助の実践的指針の策定	社会・援護局 障害保健福祉部 精神・障害 保健課
・ふれあい心の友訪問援助事業(児童虐待・DV対策等総合支援事業25億円の一部) 児童相談所の指導の下、ボランティア(学生等)が家庭等を訪問。 ・ひきこもり等児童宿泊等指導事業(児童虐待・DV対策等総合支援事業25億円の一部) 児童福祉施設等における集団的な生活指導・心理療法等の実施。 ・ひきこもり等保護者交流事業(児童虐待・DV対策等総合支援事業25億円の一部) コーディネーター(ひきこもりの子どもをもっていた親等)の支援の下、保護者を対象に講習会・グループワーク等を実施。	雇用均等・ 児童家庭局 家庭福祉課
・「若者自立塾」事業の実施(5.1億円) ニート等の若者を対象に、集団生活の中での生活訓練・労働体験等を通じ、職業人・社会人としての能力の獲得や勤労観の醸成を支援。 ・地域若者サポートステーション事業(17.4億円) ニート等の若者を対象に、地方自治体との協働により「地域若者サポートステーション」を設置し、専門的な相談等を実施。	職業能力開発局 育成支援課 キャリア形成 支援室

-4-

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課	
相談	研修
・精神保健福祉センター及び保健所、市町村における 精神保健に関する相談窓口での対応 ○精神保健福祉センターにおける「ひきこもり」の相談(実人数) 14,697人(H19年度) (※)精神保健福祉センターは、精神保健福祉法第6条に基づき、精神保健の向上 及び精神障害者の福祉の増進を図るために都道府県に設置され、相談、指導、 普及・啓発等を実施。平成20年4月現在、全国で66カ所。 ○保健所における「ひきこもり」の相談(実人数) 18,115人(H18年度) (※)保健所は、地域保健法第5条に基づき、都道府県、指定都市、中核市、その他の 政令で定める市又は特別区に設置。平成20年4月現在、全国で517カ所。 ○市町村における「ひきこもり」の相談(実人数) 14,268人(H18年度) 平成20年4月現在、1788市町村。 (参考) 「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン 平成12～14年度厚生労働科学研究(主任研究者:伊藤順一郎)で作成し、 相談担当者の業務参考資料として、平成15年7月都道府県等あてに配布。 厚生労働省のホームページにて公開中。 http://www.mhlw.go.jp/topics/2003/07/tp0728-1.html	・思春期精神保健対策研修会 ○目的: 「ひきこもり」を含む思春期精神保健の専門家の養成。 ○対象: 病院、診療所、精神保健福祉センター、保健所、児童相談 所等に勤務し、児童思春期、精神医療、精神保健福祉に 関係する業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健 福祉士、臨床心理技術者等。 ○内容: ◆総論:精神医学の歴史と現状、子どもの診方、接し方 等。 ◆各論:不登校、ひきこもり、家庭内暴力、いじめ、児童虐待、 こどものPTSD、発達障害などへの対応・治療方法 等を講義。 ◆事例検討:参加者からの事例を基に検討。 ○実績: 平成13～19年度までに 医師880名、看護師等2000名が受講。
研究	
・思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 ○平成19年度～21年度 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業 (主任研究者:国立国際医療センター国府台病院 斎藤万比古) ○内容:思春期ひきこもりに対する評価・治療・援助の実践的指針を策定することを目的とした研究	

-5-

厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課

ひきこもり等児童福祉対策事業（平成21年度予算案） 〈児童虐待・DV対策等総合支援事業25億円の一部〉

・「ふれあい心の友訪問援助事業」

児童相談所の児童福祉司の指導の下、学生等のボランティア（メンタルフレンド）がひきこもり等の児童の家庭等を訪問し、当該児童とのふれあいを通じて、児童の福祉の向上を図る。
※平成19年度実績（自治体数：44）

・「ひきこもり等児童宿泊等指導事業」

ひきこもり等の児童を一時保護所等に宿泊又は通所させ、集団的に生活指導、心理療法等・レクリエーションを実施し、児童の福祉の向上を図る。
※平成19年度実績（自治体数：32）

・「ひきこもり等保護者交流事業」

コーディネーター（児童相談所OBやひきこもりの子どもをもっていた親等）の支援のもとに、ひきこもりの子どもをもつ保護者を対象として、講習会やグループワークなどを実施し、ひきこもり等の子どもに対応する力を身につけさせ、子育てに対する不安を軽減するなど子育て家庭に対する支援の充実を図る。
※平成19年度実績（自治体数：5）

6

厚生労働省職業能力開発局育成支援課キャリア形成支援室

ニート等の若者の職業的自立支援の強化

＜施策の方向性＞

いわゆるニート状態の若者（35歳未満）の数は、減少傾向にあるものの依然として高水準にあり（平成19年62万人）、さらに30代後半の無業者の増加も認められる。

このため、「新雇用戦略」や「社会保障の機能強化のための緊急対策～5つの安心プラン～」において、これら若者の自立の実現を図るため、

- ① 地域若者サポートステーションを拡充し、自治体や教育機関等との連携によりニート等への支援を強化する
- ② 若者自立塾の訓練メニューを多様化することとされたところである。

こうした方針を踏まえ、地域若者サポートステーション事業の拡充を図るとともに、若者自立塾事業の的確な推進に当たるなど、ニート等の若者の職業的自立支援を強化する。

＜21年度予定額＞

平成20年度予算額
19.5億円

平成21年度予算額
22.4億円

＜21年度予算案の内容＞

1 地域若者サポートステーション事業の拡充 17.4億円（12.9億円）

- 設置拠点の増設（全国77→92箇所）【拡充】
- 相談支援体制の充実（総括コーディネーターの配置）【拡充】
- 自治体、教育機関等とのネットワーク機能を強化し、若者・保護者に対し能動的に働きかけ等を行う「いつでもどこでもサポートモデル事業」を20箇所の地域若者サポートステーションでモデル的に実施【新規】
- 若者支援機関に係る情報を整備する「支援ネット情報整備事業」の実施【新規】
- 支援対象年齢を30代後半まで拡大【拡充】

2 若者自立塾事業の実施等 5.1億円（6.5億円）

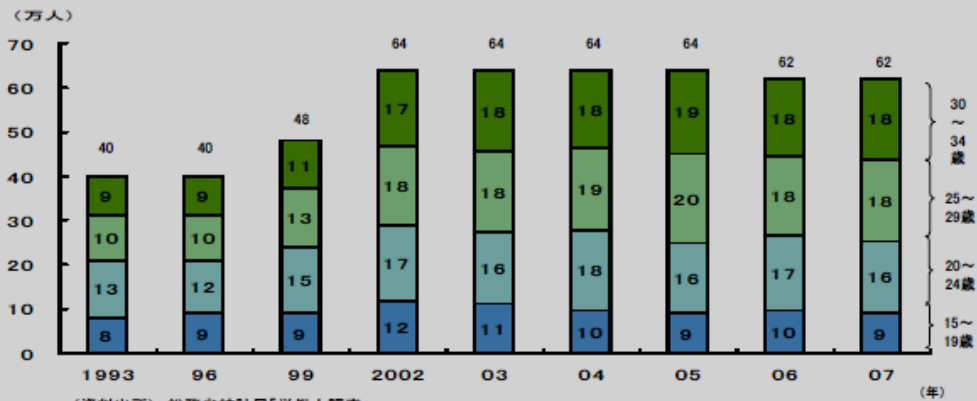
- 現在実施している「3か月専門型」及び「6か月専門型」のほか、新たに「3か月・6か月並立型プログラム」を実施（10箇所程度）
- 支援対象年齢を30代後半まで拡大【拡充】
- 「若者自立支援中央センター」の整備

7

ニートの状況

○ いわゆる「ニート」の数は、1993年の40万人から64万人に増加して以降、同水準で推移していたが、2006年には62万人に減少し、2007年も同水準。

ニートの数の推移



(注) 「ニート」の定義は、15～34歳で、非労働力人口のうち、家事も通学もしていない者。

「若者自立塾」事業の実施等 平成20年度予算額：6.5億円 平成21年度予算額：5.1億円

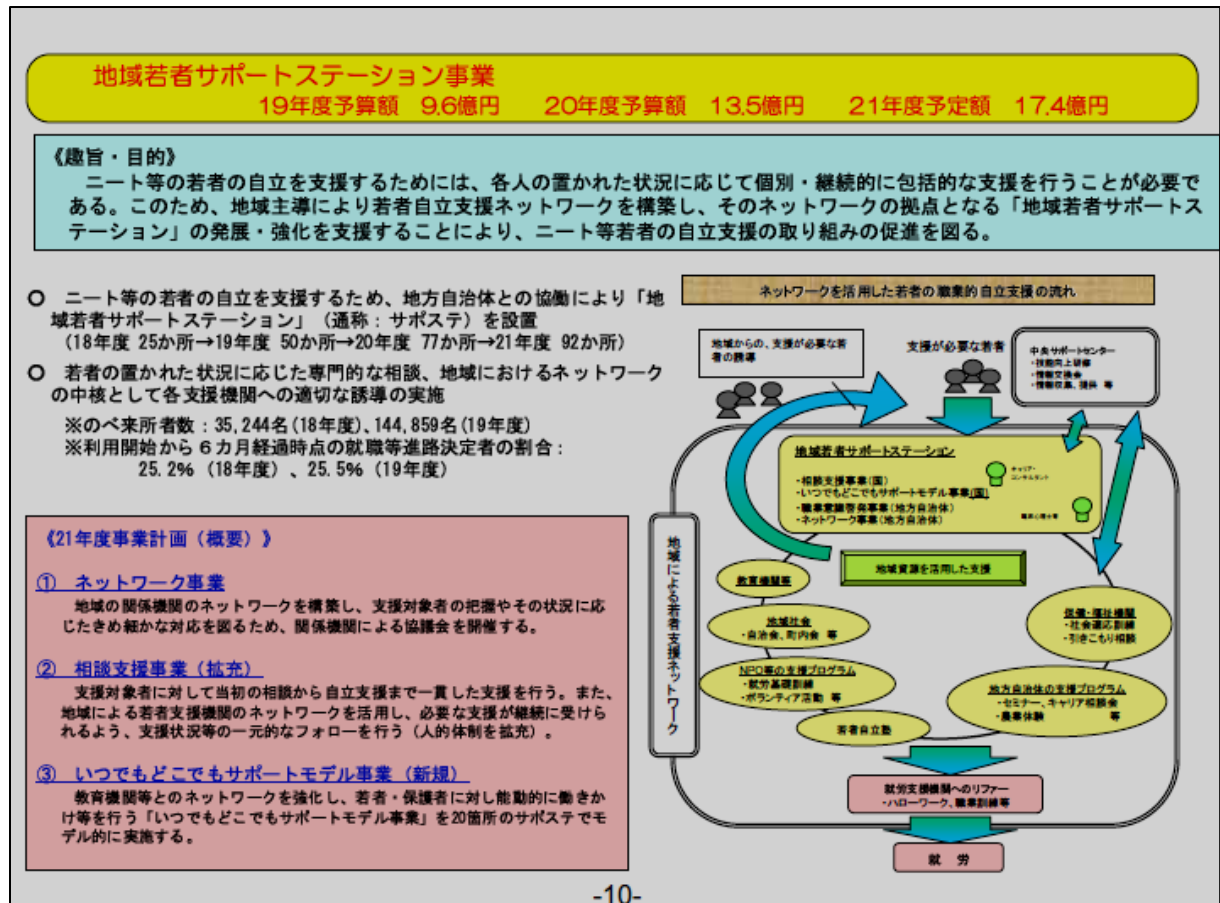
- 合宿形式による集団生活の中での生活訓練、労働体験等を通じて、職業人、社会人として必要な基本的能力の獲得、勤労観の醸成
→ **働く自信と意欲の付与**
- 民間事業者、NPO等により、平成17年度から実施、平成20年度は全国30か所で実施（平成21年度も30か所で実施予定）
- 期間は3か月・6か月（平成21年度は「3か月・6か月並立型プログラム」を10か所程度で実施予定）
- 修了者数1,755名（事業開始から平成20年8月末日までの累計） ※事業実績は修了後6か月経過後の就労率
→ 平成20年2月までの修了者の6か月経過後の就労率 **62.9%**

若者自立塾

(平成20年12月24日現在)



若者自立塾での活動風景



上記資料に沿って、ひきこもり関連施策の説明。

田辺市ひきこもり検討委員会（平成20年度）議題（出席者はひきこもり検討委員の人数）

第1回（H20.4.26）出席者 22名	第2回（H20.10.25）出席者 23名
・検討委員会設置要綱の変更 ・ひきこもり検討委員長の選出 ・平成19年度事業報告について ・平成20年度事業計画について ・その他	・平成20年度上半期事業報告 ・平成20年度下半期事業計画 ・ビデオ視聴「インターネットでさぐる若者の声」 ・その他 ハートツリーより 南紀若者サポートステーションの紹介

小委員会（平成20年度）議題（出席者はひきこもり検討小委員の人数）

第1回（H20.4.17）出席者 7名	第6回（H20.11.20）出席者 6名
・平成20年度事業について ひきこもり検討委員会について 講演会について 家族会・自助会・家族会について ・昨年度からの課題について ひきこもり検討委員について 窓口業務について ・その他 ハートツリーより報告等	・ひきこもり講演会について ・平成21年度 ひきこもり支援の状況について ・講義 「ひきこもりから社会へ」 ＝フリースペースでの活動をとおして＝ 講師 紀南こころの医療センター
第2回（H20.6.19）出席者 9名	第7回（H20.12.18）出席者 7名
・平成20年度事業について 講演会 行政局講座 ・昨年度からの課題について	・ひきこもり講演会について ・家族会・自助会の状況報告 ・精神保健福祉センター所長より報告
第3回（H20.7.17）出席者 7名	第8回（H21.1.15）出席者 7名
・平成20年度事業について ひきこもり講演会 行政局講座 ・昨年度からの課題について 小委員会について 相談窓口の課題	・ひきこもり講演会について ・ひきこもり検討委員会改選について ・平成20年度スーパーバイズとその他の状況について
第4回（H20.8.28）出席者 7名	第9回（H21.2.19）出席者 8名
・ひきこもり講演会について ・行政局講座について ・ひきこもり検討委員会について	・ひきこもり講演会報告について ・平成20年度事業報告について ・平成21年度事業計画について ・事例検討について
第5回（H20.9.18）出席者 7名	第10回（H21.3.19）出席者 6名
・ひきこもり講演会について ・ひきこもり検討委員会について ・講義 「ひきこもり型不登校とメンタルフレンド」 講師 紀南こころの医療センター 臨床心理士 東 知幸	・平成21年度事業計画について ・田辺市のひきこもり支援冊子について ・平成20年度相談窓口の現状と課題について

(8) ひきこもり検討小委員会 講義1

題目:「ひきこもり型不登校とメンタルフレンド」

講師:紀南こころの医療センター 臨床心理士 東 知幸 氏

参加者: 13 人(ひきこもり検討小委員及び関係者)



講演内容

【1990年代の不登校激増の要因】

最初に、不登校・ひきこもりについての自身の考えを述べたいと思います。1990年代頃から、なぜ急激に不登校が増えてしまったのか、教育現場から正確な報告がされるようになったということもあると思いますが、他に3つの要因が考えられます。

不安定な家族の増加

1990年のバブルの崩壊以降、経済的に苦しい家庭が増え、親は仕事に精一杯で、子どもたちに適切な注意・関心が払われていないという状況があります。

インターネットの普及

携帯でも簡単にインターネットが出来る時代で、不登校なのは自分だけじゃない、他にもそんな人がたくさんいるから大丈夫だと感じられます。インターネットは、24時間できます。以前は、家にいると退屈で、少し出てみようかということになりますが、今は、家にもインターネットの楽しさがあります。

誤った個人主義

不登校・ひきこもりが多いのは、自分と同じ年代ぐらいで、30歳前後の年齢層に多いです。この時代が、どういう風潮の中で育ったのかというと、「個性」が打ち出された、個性の重要性ということがさかんに言われた時代です。「自分らしさ」一番大事な事、「自分は特別」というような自己愛的な行き過ぎた価値観があります。好きなことをやっていれば、嫌なことはやらなくて良いという風潮があります。

なぜ、誤った個人主義になったのか。青年期というのは個人のアイデンティティ(自分とは何者かという問いに対する自分なりの答え)の確立をしていく時期です。個人だけでなく世代にもアイデンティティがあります。青年期は、親越えをする時期でもあります。親世代と異なる価値観を持つことで、親越えをしようと考えます。親の世代はより画一的な世代です。子どもたちは会社人間である親を見て、自分らしさを発揮できないような仕事はしたくない、サラリーマンはカッコ悪いというように思うようになりました。親世代も、社会の価値観に縛られ、自分らしさを発揮出来なかったことを、自分の子どもたちにさせたくないと思うようになりました。嫌なことは無理にさせる必要がないんじゃないかと。ひきこもり、不登校を生みやすい背景です。

【不登校の援助に必要なこと】

[不登校児は自信がない]

不登校児は自分が人に受け入れてもらえる。人と良い関係を作ることができるという自信がありません。ですから、援助のためには自信をもってもらう必要があります。

不登校児に「おまえは出来るんだ」「自信を持て」と言うのは簡単ですが、簡単なことというのはあまり効果がありません。不登校児は「何を根拠にそんなことを言ってるのか」と思います。不登校児に対して「どんな言葉をかけたら良いですか？」と保護者の方から聞かれることが多いですが、実際のところ、魔法の言葉というのはありません。

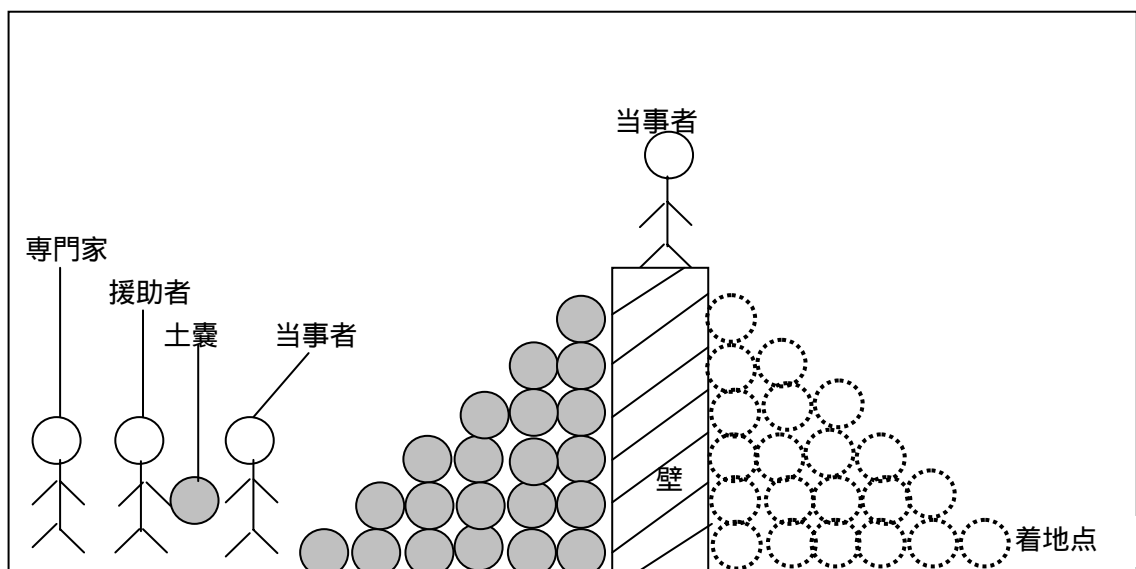
[自信を育むにはどうすれば良いのか。]

そこで、態度で示すことが必要です。大事なことは継続的な人とのつながりです。援助者の継続的な関わり、継続的に自分に会いに来てくれる人がいる、自分に会うのが楽しいと思ってくれる人がいるということで、人間関係に対する自信を持てるようになってきます。

まずは、家族以外の人と1対1の関係を作ることです。それは、カウンセラーでもメンタルフレンドでも良いと思います。1対1の関係をしっかりと作ることです。その後、もう少し大きな集団、小集団に入ることです。学校では、適応指導教室のようなところになると思います。その後、大集団にというふうになっていけば良いと思います。

継続的な支援が必要で、たまに会いに行くというのではいけません。用事があるときだけ会いに行くのは、その人に会いに行ってるのではなく、用事に会いに行っているのです。他にもない、その人に会いに来ているんだとわかってもらうためには、定期的に会いに行くことが必要です。そのように態度で示すことによって不登校児は自信をつけていきます。

会い続けることが大切で、援助者は時間がかかると頭では分かっていますが、実際は、想像以上に時間がかかることを認識する必要があります。



心理的援助というのは、1回や2回では出来ません。イメージしやすいように例をあげたいと思います。当事者の前には高い壁があって前に進むことができません。心理的援助というのは、それを超えるために、当事者と援助者が土嚢を一緒に積み重ねていくとイメージしてください。ただし1回に積める土嚢の数は一個だけです。そう考えるとかなり時間がかかることがわかります。土嚢を積んでいくことで、何ヵ月後、または何年後にようやく上まで登

れます。

上まで登ったとき、もう大丈夫といって背中を押すと反対側に落ちてけがをしてしまいます。そこで壁の反対側の、着地点の支援が必要になってきます。同じように反対側に土嚢を積む作業というのが必要になってきます。そこでもやはり時間がかかります。反対側に土嚢を積む作業というのは、例えば社会的支援ということになります。就労支援というようなことも含まれると思います。地道に1つずつ土嚢を積んでいくことが大切です。

メンタルフレンドは、専門的な訓練は受けていないので(自分がメンタルフレンドをしたときも心理は勉強していてもまだ学生でした)、専門家によるスーパーバイズは、してもらっていました。専門家は土嚢の積み方が上手く、なるべく短い期間で上手に積める方法を知っているので、アドバイスしてもらうことは必要です。

「家庭環境の調整」

頭では、子どもの良いところは認める、叱るべきところは叱ると分かっていても、実際には出来ていない親が多いです。講演会で話を聞くだけでは、理解出来ていません。そこで親とも定期的に話をして、点検していくことが必要です。

【メンタルフレンド事例】

最初に、メンタルフレンドというのはどういうものが説明したいと思います。「メンタルフレンド活動とは、ひきこもりがちな不登校児に対して大学生などがボランティアとして家庭訪問を行い、一緒に遊んだり、会話をしたりしながら交友を深めていき、不登校児の成長を促す活動」(資料1)です。

私が参加していたメンタルフレンド活動には、週に1回、1時間という枠組みがありました。ちょうど臨床心理士の相談と同じような感じです。派遣元は、児童相談所や教育委員会等です。次にまとめた事例(資料2)に沿って、話をしたいと思います。メンタルフレンドは、専門家ではないですし、特別なことはしていません。この事例から特別なことをしなくても人は変化していくということを知っていただければと思います。

事例研究 1. 事例の紹介<省略>

家庭訪問中、言葉によるやり取りは少なかったです。相手から話かけてくることはほとんどありませんでした。無理に話する必要はありません。こんな自分でも人と関われる。一緒にいて楽しいと思ってくれる人がいる、会いに来てくれる人がいると感ずることで彼は自信をつけていったと思います。なかなか動きは見えてこなくても、水面下で少し動いてみようと思うようになっています。会った時に特別なことをする必要はありません。一回一回の面接で土嚢を積んでいくということ、そういうことが大切です。

【質疑応答】

(Q) 土嚢を積んでいくイメージは、よく分かりました。不登校の小・中学生の着地点を積んでいくのは、どのようにする方が良いでしょう。中学生は、思春期でもあります。担任・副担任がどういった取組で着地点を作る、そのために必要なことは何でしょうか。

(A) 学齢期は、学校に戻ったとき、久しぶりに学校に来た時の雰囲気作りということが大

切かと思います。

さきほど述べましたように小・中・高の不登校生徒、ひきこもりの人は自信がありません。ひきこもったまま、高齢になっていきます。若いうちに家族以外の信頼出来る人を作ることが必要です。

(Q) 面接を出来ればよいが、会いたくないという場合はどうしたら良いのでしょうか。

(A) 親との関係を保ち、良い家庭環境を作ることが大切かと思います。少しでも、子どもの気持ちが動いた時に適切に対処できるように関係を保っておくことが必要です。

(Q) 電話ではどうなのでしょう。

(A) 電話であっても、継続的に行うことで信頼関係の構築ができてくると思います。

(Q) 分かりやすかったです。家庭環境の作り方というのは、どのようにするのですか。

(A) メンタルフレンドの場合は、家庭環境の調整はメンタルフレンドではなく臨床心理士などが行います。本人への援助と家族への援助の両輪でやっていくことが必要です。

(Q) メンタルフレンドとしては、年齢の差はどれくらいまでが適当なのでしょう。

(A) やはり、年齢が近い方が、話が合いやすいというのがあります。年が近い方が、子どもにとって、こういう風になりたいという一つのモデルになります。

(Q) 斎藤環先生は、家庭訪問に積極的ではありません。保健師としては、家庭訪問をスキルとして持っています。注意点というのは、何かあるのでしょうか。

(A) 注意点は、面接室で会うよりも家庭内の様々な動きに巻き込まれるリスクが高いことです。あと、何か生産的なことをしなければいけないと思ってはいけないということです。何も生産的なことがなくても一緒に時間を過ごすことが重要なのです。それが態度で示すということです。自分に会いたいと思ってくれる人がいるということを子どもが知ることが重要なのです。

(Q) メンタルフレンドには終わりがあるのでしょうか。

(A) メンタルフレンドは中学卒業で終わりです。高校生以上にも援助してくれる機関になくセッティングをしておく方が良いです。そのための情報提供は必要になります。

(Q) メンタルフレンドは、親とも話をするのですか。親への助言はどうしていますか。

(A) メンタルフレンドは枠(治療構造)を分けています。親とは話し込まないということになっています。メンタルフレンドが親と話していると、子どもは自分でなく親に会いに来ていのかと思ってしまいます。親はメンタルフレンドに相談しようとするときもありますが、メンタルフレンドはなるべくあいさつ程度で終わらせるようにします。親への面接は、メンタルフレンドではなく専門家が担当しています。

(Q) この地方では、児童相談所がメンタルフレンドを派遣しています。ところによっては、青少年課の場合もあると思うのですが、どうでしょうか。

(A) 児童相談所や教育委員会の他に、大学の相談機関や民間団体の場合もありますが、この事例は、一つの大学からメンタルフレンドを集めています。その方が個々のメンタルフレンドへのサポートをしやすく良い援助が出来ます。

(Q) 面接時間はどうしているのですか。人生ゲームなどは時間がかかるのではないかと思います。

(A) メンタルフレンドの実施団体によって時間設定は違います。しかし、1 時間ぐらいが限界ではないかと思います。経験的には2時間くらい会っていると疲れてきます。集中して会えるのは1時間くらいです。メンタルフレンドが疲れていると、自分に会うと疲れるのかと子どもは思ってしまいます。ゲームは途中までしか出来ないですが、最初から 1 時間で終わりということが分っているので問題ありません。

(Q) もっといて欲しいという要望はありませんか。

(A) 事例によっては1時間で帰ることをひきとめる場合もあります。そのために週1回、1時間という枠組みがあります。「前は延長してくれたのに、今日はすぐに帰られた」などいろいろな感情を生まないためにあらかじめルールを決めておくことは必要です。枠はとても大切だと思います。一緒に外出すると、枠が薄くなってしまいます。私の参加していたメンタルフレンドでは活動場所は「家の中か、その周辺」でということを決めています。信頼関係を損なうリスクを少なくするためには枠というのは必要です。臨床心理士の面接の1週間に1回1時間という一般的な形に準ずるようにしています。

(Q) メンタルフレンドの資質には、何が必要でしょうか。限られてくると思います。時間もかかると思います。

(A) たとえ週1回、1時間だとしても、実際には学生でないと、なかなか時間をさけないと思います。途中で辞めたりせずに継続的に関わることが必要です。

(Q) 土嚢を積む作業を途中交代するときの申し送りはどうしているのか。もう一度、最初からなるのでしょうか。

(A) ある程度土嚢を積めていると、また最初からスタートということにはなりません。メンタルフレンドが途中交代するのも、合理的理由があると良いと思います。メンタルフレンドが、合理的理由なしに途中で辞めるというのは、人へのいっそうの不信感を抱く結果になります。

■私は、福祉職ですが、最初の土嚢を積み、登りきったところで下りていくステップを作る。土嚢を積んでいる最中に、次のステップをスーパーバイズしてくれる人がいれば再確認できます。天辺まで登りつめることに目がいてしまいがちですが、下りるステップのことを考えるということを改めて再確認することが出来ました。土嚢を何十も積むには、ネットワークは必要で、どう繋がっていくのか、皆で積んで行けるのかということではないかと思いました。

■学校は、子と親の相談を受けます。メンタルフレンドのような人がいれば、随分違うと思

います。経験からすると、2 年くらいはかかるのではないかと思います。それほどゆっくりしています。教師はスーパーバイズしてくれる人がいません。試行錯誤です。教育委員会などで、バックを支える組織があれば良いと思います。個別に奮闘されています。

■ 枠組みというのは、難しいです。

■ メンタルフレンドの後の、適応指導教室に 5 年関わってきました。メンタルフレンドの話を聞かせてもらって、非専門化が行くメリットというのも分かりました。学校の教師もそうだと思いますが、そのままの自分でぶつかる、専門的アプローチも効果的だと思いますが、ぶつかって心の交流をするのも大切であるというのを改めて感じました。

■ 学生が近くにいと良いが、この辺はいません。

■ この地域でも、どうすれば出来るのか考える必要があると思います。世代のアイデンティティの話、誤った個人主義、団塊の世代の親の資質の話がありました。団塊の世代は、一見群れているが、群れていないという感じではないかと思います。自分が果たせなかったところを子どもにというところがあるのではないかと思います。コンプレックスにもとづいている。やり戻しもあると思います。極端な方にいつているのではないかと思います。いやな事はやらなくて良いという風潮が出来たのかについては、議論の余地があるのではないかと思います。

資料 1 東 知幸:メンタルフレンドと心理臨床。(鑪幹八郎監修・川畑直人編:心理臨床家アイデンティティの育成, 創元社, 2005)

資料 2 東 知幸:引きこもりがちな不登校生徒に対するメンタルフレンドによるアプローチ, 心理臨床学研究, 19(3), 291-300. 2001

(8) ひきこもり検討小委員会 講義2

題目:「ひきこもりから社会へ」- フリースペースでの活動をととして -

講師:紀南こころの医療センター 臨床心理士 浅井 育子 氏

参加者: 10 人(ひきこもり検討小委員及び関係者)



講演内容

1、「ひきこもる」ことについて

部屋に「こもる」、自分の中に「こもる」、という2つの意味があると思います。

原因は人それぞれですが、彼らは何かしらで傷つき、苦しくて「こもる」ことを選択しています。ひきこもることが自分を守る手段だ、と無意識で感じているのかもしれませんが。そう考えると、「ひきこもる時間」は、その人にとって「必要な時間」ともいえます。

野生の動物は、怪我をしたときに、何日も同じところでじっと座り続け、傷を癒すといえます。その間は食事もとらず、ただ回復するのを待つそうです。ひきこもるということは、それに近いことではないかと思います。何かに傷ついて、どうしようもないというときに、いったん外の世界から遮断されたところで、じっと時を過ごし、その中で自分と向かい合うことで、人は傷を癒し、また外に出て行くための準備をしているのだと考えます。

2、現代の子どもたちの特徴

ひきこもりは、思春期とよばれる時期に始まることが多いです。思春期という時期は、今まで親や周りの大人たちから影響を受けて作ってきた価値観をいったん壊し、あらためて自分自身の価値観を作っていくときです。たとえていうと、いったん建てた家を壊して、そこにもう1度自分の手で家を建てるようなものです。しかし家は壊しますが、土台はそのままです。ですので、土台がしっかりしていないと崩れてしまいます。この土台にあたるのが、幼少期に受ける愛情や、人間に対する基本的な信頼感のようなものであると思います。

いったん建てたものを壊して建て直すという作業は、とてもしんどいものです。建っていたものが、壊しやすい、柔軟なものならまだしも、親や周りが偏った価値観であったり、それが自分の感覚と大分違うものであったりしたとき、それを壊す作業というものは、たいへん苦しいものになります。この苦しい作業のなかで、彼らは、反抗したり悩んだり、ときには自分の殻に閉じこもったりしながら、「本当の自分らしさとはなにか」を探していきます。

6年間フリースペースで活動し、3年前からは中学・高校のスクールカウンセラーをしています。彼らとかかわるなかで感じた、最近の子どもたちの特徴についてお話をさせていただきます。

・自主性の乏しさ

「自分で考えて動く」ことが苦手な子が多いです。「これやって」と言われればやりますが、自分からやることを見つけて動くことはできません。学校の勉強においても、予習・復習などは、昔は自主的にやるものでしたが、今は教室の黒板に『予習してくること』と

書かなければ「やれって言われてないもん」という子が多いです。

この背景のひとつに、遊びの方法が変わったことがあると思います。昔のように、公園に集まって、何して遊ぶ？から始まるのではなく、今はゲームがほとんどです。ゲームもプレイステーションのようなテレビ画面を見るものから、携帯式のゲームが主流になっています。通信もできますが、一人でやっている子が多いです。遊びが個人化しています。

テレビやインターネットなどもそうですが、これらの媒体は、「発信」よりも「受信」が中心です。情報や刺激が向こうからやってきてくれます。また、少子化や生活が豊かになるに伴い、親が子どもにかけられる手間や時間も、昔に比べると多くなっています。欲しいものは大体買ってもらえたり、お願いしたりお小遣いを貯めたりしなくても、用意してくれているということも多いのではないかと思います。このような背景から、発信よりも受信の子、受け身の子が多くなっているように感じます。

・対人関係～メールを中心に～

最近では人間関係が希薄になったとも言われていますが、子どもたちは、友達関係においてはとても気をつけています。一見気にしていないように見える子でも、実は相手との距離感を常にはかって、気を張っているところがあります。悩みごとがあっても、本当に悩んでいることは話せないでいます。なぜかと聞くと、明るい雰囲気壊してしまうから、と答えた子もいました。人は「悩んでも大丈夫、受け入れてもらえる」という環境でないと、安心して悩んだり落ち込んだりできません。「暗い自分だと受け入れてもらえないかもしれない」という不安が彼らのなかにあります。自分をさらけ出すことを恐れている子が多いように感じます。

その反面、メールやインターネットでの繋がりをとても大事にします。返事の早さや絵文字の多さにこだわり、10分以内に返事が来ないと不安になったり、家でも肌身離さず携帯を持っている子が多いです。1日500通メールするという子もいました。相手との関係の濃さをメールの数や頻度ではかろうとする傾向があります。

好きな人に告白するときや、喧嘩して謝るときも、メールでする子が多いです。面と向かって言うよりも、メールの方が言いやすいのです。なぜかという、メールはダイレクトではないからです。うっかり変なことを言ってしまうたり、沈黙になったりすることがありません。失敗が少なくなるということです。また、相手が目の前にいないので、反応を気にしすぎることなく自分の気持ちが出しやすいといえます。面と向かうと無口な子が、メールやネット上だと饒舌ということも多いです。

携帯のメールは、特に用事がなくても、リアルタイムで何通もやりとりをします。1日何十通も「おはよう」「何食べた？」などの短い文章をやりとりします。電話で喋ったらいいやん、と思うようなことでも「電話は何喋ったらいいか分からんから苦手やねん」という子が多いです。携帯メールで何度もやりとりすることは「つながっている」という感覚になりやすく、彼らはコミュニケーションに苦手意識を感じ、失敗を恐れながらも一方では人と「つながる」ことを強く求めていると考えられます。

・ひきこもった場合の出づらさ

外の世界で傷ついて自分の殻にこもったとき、現代の環境はなかなかそこから出られにくい になっていると思います。外の刺激を遮断した状態で、思い切り自分と向き

合うことで、人は外に出る準備をしていきます。ですが今はインターネットが普及しており、買い物もできるし、情報も入ってきます。しんどい思いをして外に出なくても、ネットを通じて誰かと繋がることもできます。またネットは匿名性があり、「そのままの自分」で勝負しなくても良いという面があります。本人にとっては助かる環境ですが、ひきこもりの期間を延ばしてしまうという可能性が心配されます。バーチャルの世界に閉じこもってしまうこともあります。また今はテレビや冷蔵庫なども自分の部屋にある子が多いです。部屋にあまりにも全部がそろっていると、出る必要がなくなってしまうと思います。不自由な生活というのは、一方では出るきっかけを逃してしまうということもあると思います。

3、フリースペースの活動について

1) 活動内容

3年前まで、東京にあるフリースペースで働いていました。不登校やひきこもりなどで社会に出ていない人たちの居場所として運営されているものです。私が勤めていた所は、精神科医が主催者で、臨床心理士と、心理士を目指す大学院生がスタッフとなって運営していました。人とかかわりが苦手で、神経症症状がひどかったり、人格障害圏と思われる方も多かったです。登録人数は35～40人ほどで、スタッフは15人程度です。

2) 子どもの過ごし方とスタッフのかかわり方

子どもたち(メンバーと呼んでいました)は、月から金まで、13～17時の自由な時間にやって来ます。メンバーの年齢は小2から30歳以上まで幅広く、ほとんどがひきこもり状態から外に出てきたばかりの方たちでした。

毎日15～20人くらいが、ひとつの大きなフロアでそれぞれ好きなことをして過ごします。各メンバーに担当スタッフがつき、色んなことを一緒にやります。4時間ずっと卓球をしている子もいれば、路線バスについて延々と語り続ける子、鏡を見て自分の顔についてずっと質問をし続ける子など、つきっきりでそれに付き合うので、スタッフのエネルギーは相当なものがいります。

カウンセリングが必要と思われる子には、面接室でカウンセリングも行います。また、クリニックと連携していたので、病理が深い人や、調子が悪そうなときは、主催者のクリニックに行ってもらいます。医師も病院で会うとき以外の彼らの様子を知ることができました。スタッフは毎日のミーティングと、週1回のケース検討会でそれぞれのメンバーへの今後の援助について検討していきます。かかわりの中で困ったことや迷ったことなどを、すぐに全体にあげて返してもらえる、という体制があるからこそ、学生のボランティアの方たちも、活動できるのではないかと思います。

6年間スタッフとして勤めるなかで感じたことは、彼らはとても敏感で傷つきやすく、人のことをよく見ているということです。スタッフの表情と行動が一致していないといけません。ダブルバインド(二重拘束。矛盾した2つの命令を受け、身動きできない状態)にならないようにすること、混乱させないことに気をつけました。彼らは対人関係

で傷ついてきて、顔色を読むことに長けています。まずは他人に対する信頼感を回復することに重点を置きました。わざとこちらを怒らせるような言動をしたり、試すような行動をとる子も多いです。そのときは、自分の中に起こるその気持ちを否定したり、抑え込まずに、なぜ自分は腹が立つのかを考えたり、ミーティングで話し合ったりしていきます。

3) 元気になっていくプロセス

1対1→少人数→多人数→同世代のグループ→社会へ

彼らはコミュニケーション、とくに「雑談」が苦手です。何を喋ったらいいか分からないといひます。変なことを言って、変に思われたらどうしよう、という不安が常にあります。食事を人前ですることも苦手です。食べながらどのタイミングで喋ればいいのか分からず、食べられなくなるのです。

人に対する恐怖心が減ってくると、次は「友達がほしい」と思ひます。でもどうやって仲良くなっていけばいいのか分からない。彼らは、自分の興味のあること、知っていることはたくさん喋ります。ですが、興味のない話に混ざったり、自分が分からない話題にも適当に相槌を打ったり、ということが苦手です。世間話ができないのです。スタッフは、そういうときに、彼らのモデルになります。適当に話を合わせながら話題をつなげることや、多少の沈黙は気にしなくてもいいことなどをリアルタイムで見ながら、ときどき話を振られて自分も会話に入る、ということを繰り返していきます。その後2人で先程の会話について振り返ったりもします。

また、新しい環境に入っていくこと、馴染むことに、非常に時間がかかります。これ以上傷つきたくないという思ひが強いため、リスクがあるところに飛び込む、ということができません。くわえて、完璧主義で、極端な人が多いです。0か100かで考え、60点くらいでぼちぼちやる、ということが苦手な人が多いと感じました。スタッフは、白黒はっきりじゃなくてもいい、50～60点くらいでやれたらいいんやで、ということ、言葉だけではなく、実際の体験のなかで実感してもらえるようにかかわっていきます。

メンバーは、何年もかかる子もありますが、何ヶ月かで卒業していく子もいます。やはり低年齢の方が復帰は早いように思ひます。相談は、本人が来る来ないにかかわらず、早い方が好いと思ひます。担当スタッフとの1対1の関係から、他のスタッフを交え、他のメンバーを交え、という風に関係を拡げていきます。メンバーだけで遊べるようになると、外に気持ちが向かっていきます。スペースに物足りなさを感じるようになると、外へ出る準備段階ということで、一緒に外へ出るための準備をしていきます。

4、家から外へ

1) 段階的なかわりを

ひきこもり状態から社会に出て行くとき、いきなり仕事を始めたり、学校に行き始めたりする人もいますが、やはり多くの人は、外の世界に出ることに大きな不安を抱えていて、一歩が踏み出せないでいると思ひます。ひとつひとつ足場を作りながら、段階的に

援助していくことが必要です。途中でつまづいても、そこで支えてくれる人がいれば、それまでの経験を生かしてまた挑戦しようという気持ちを持てます。

一番大きな支えとなるのは、やはり家族です。本人と会えない場合でも、家族の方と我々がつながっていることで、間接的に援助することはできると思います。家族の方が良い意味で開き直れると、本人も不思議と元気になってきたりします。まず家族がこの状態を受け入れること、そして本人の力を信じ、長い目で見ることが、ひきこもりから外に出るはじめの一歩になるのではないかと思います。

2)こちらが「半歩」前に出ること

彼らとかかわるときに大切にしていることは、「半歩」だけ前に出ることです。彼らは、自信がない状態です。自分の考えや判断にも自信を持てないということです。自分で動き出すまでずっと待っていられば、それはそれで良いと思いますが、とても時間がかかることがあります。本人に任せきってしまうと、何年も経ってしまうこともあります。それも決して無駄ではないですが、タイミングを見ながら、少し背中を押すことで、回復までの時間が少しでも短くなることがあると思います。

たとえば家庭訪問でも、「何日の何時に行くから、嫌だったら出てこんでもいいからね」と伝え、とりあえず行きます。保護者の方には、本人が嫌がったら無理に出さないでください、と話しておきます。自分から「来てください」と言う子はほとんどいません。そして、嫌だったら絶対に出てきません。ひきこもる、ということは、エネルギーがいることでもあります。ひきこもれる人は、ある意味とてもパワーがある人です。ですので、頑固な人が多いです。嫌だと思ったことはガンとして動きません。家庭訪問して出てくる出てこないにかかわらず、そこには本人の意思があります。会えるか会えないかよりも、そこが大切です。そして、それをフィードバックすること、「自分で決めたことやから、それで良いんやで」と、本人と家族の方に伝えることも必要だと思います。

何かを始めたいが、迷っているように見えるときは、「やってみようよ！」と少し強引に引っ張ることも、有効な方法のひとつだと思います。自主性をスムーズな形で引き出せる場合があると思います。ですが、タイミングを間違えないことが大切です。「本当にしんどそうなときはすぐ引く」ことを常に念頭においています。

また、「教えてもらう」ということも多いです。彼らは、自分が好きなことにはとても詳しいです。まずはその話を十分してもらいます。こちらが分からなくても、興味を持って聴くことで、彼らが色々と教えてくれます。本当に興味を持つことが大切だと思います。「自分の話を、興味を持って聞いてくれる人がいる」「自分にも教えられることがある」という体験は、彼らの自信を伸ばします。

もうひとつ、サービスしすぎないということです。先まわって色々やってしまうずに、彼らから希望が出てきたらそれにできる限り誠実にこたえる、ということが大切だと思います。こちらが顔色を伺いすぎず、間違った対応をしたら謝る、文句があつたら言ってもら、それが、彼らの自主性を伸ばすことにつながりますし、「対人関係で少くらしい失敗しても、やり直しはきくんだ」というモデルを見せることにもなると思います。

思春期・青年期の子どもさんたちとかかわって一番痛感したことは、「ごまかしがきかない」ということです。だからこそ真正面から向き合うことの大切さを感じます。彼らは向

き合ってくれる人を求めています。「治してやろう」とか、「こう変えてやろう」と思うのではなく、そばに寄り添いながら半歩だけ先を歩いていること、そして視線は決してその先にある光を見失わないこと。それが彼らへの援助の基本になると思っています。

5、今度の課題

1) 設備の活用

働きたくても、いきなり普通と同じように働くには不安、という人たちが多くなか、東京では地域と連携したり、協力してもらったりするのは難しかったです。田辺は、ハートツリーやサポートステーションなどもあり、支援の環境は素晴らしいと思います。

2) 家庭訪問の充実

家から出てくるまでが大変なので、家庭訪問は有効な方法だと思います。家庭に新しい風を入れることにもなります。ですが、家族力動に巻き込まれやすい、退行を起こさせやすいなどのリスクも充分知った上で行うことが必要だと思います。スーパーヴィジョンなどを活用しながら、一人で抱え込まないようにすることが大切です。

3) 相談窓口の門を拡げる

いざ相談になるとかまえてしまう、色々な資源があることを知らない人も多いのではないかと思います。敷居を低くしていくというのも大切ではないかと思います。たとえばホームページの充実、メールによる相談など、インターネットをうまく使うことも有効です。

メールを使うときは、枠をしっかりと作ること、一人で抱えないこと、最終的な目的は会うことであることを意識しておくことが必要だと思います。各機関とのネットワークを作っていくなかで、どこかに居場所が見つけられれば、援助の第1歩になるといえます。

【質疑応答】(は参加者からの意見)

Q: 今の世の中の問題もあるのかと思います。障害者の支援をしていますが、同じ屋根の下でも、朝起こすのをメールでする人がいます。楽な方に行っています。どんどんIT化が進むなか、もっと引きこもりが増えるのではないかと思います。親がゲームをする時間を制限なく与えていたりします。親にも話をする必要があるのでは。

A: 現代はゲームやインターネットの充実で、ひきこもりやすい環境にあると思います。予防の意味でも、幼少の時期に親御さんに色んな話をする必要はあると思います。

ゲームや携帯なども、枠を決めることも必要だと思います。

Q: 家族の力動に巻き込まれたり、親に引っ張られたりすることがある。支援者の立場としては、本人側に立つか中立に立つか、どちらが良いのでしょうか。

A：これは誰の面接なのか、を長い視点で見えていくこと、どこを大切にしていけるかということだと思います。一人でするのは難しいです。自分の気持ちを定期的に振り返ることが大切です。支援者にも相談できる相手が必要だと思います。

Q：東京とこちらでは色んな面が違ふと思います。環境の違いによって、ひきこもっている意味が違ふのではないかと思います。

A：「自分がどのように生きていくか迷い、それを見つけていく」という意味では、都会でも田舎でも同じだと思います。都会は刺激が多く、色んな人がいるので、出て行く場所や選択肢は多いです。その点では居場所を見つけやすいといえます。反面、自然に触れたり、地域の人とつながったりという体験はしづらいです。

Q：相談を中断した人や一応卒業した人に、メールでフォローしていくというのはどの程度すれば良いのでしょうか。

A：中断の理由にもよりますが、面と向かって話すのが苦手という場合、メールを利用するのは良いと思います。しかしこちらの無理のない範囲でやることが重要です。毎週何曜日にメールチェックするからね、などの枠を始める前にきちんと作っておきます。

無理が出て、途中で止めると余計に傷つけることになります。フリースペースでもフォローアップにメールを使っていました。元気になっていくと、相談も友達にできるようになり、自然とメールは減っていきます。メールは個人的になりやすいので、組織として取り組むことが大切だと思います。

Q：フリースペースには種類があるのか。フリースペース同士は繋がっていないのか。

A：個々に活動しています。宗教的な色が強いところや、お金がたくさんかかる場所などもあります。誰でも設立できるため、事前に色々と調べていかないと、私的なものも多いです。

Q：学生がボランティアでかかわれる環境は良いと思う。しかし田辺には大学がないので、田辺でできることは何か考えると、ケース検討がもっと必要ではないかと思います。講演会などで質問しても、答えは一般的なものになります。閉じたメンバーで個別的なカンファレンスがあればと思いました。

A：ケース検討はとても有効だと思います。自分自身の支えにもなります。

Q：フリースペースは、財政的にはどうしていたのですか。

A：NPO法人でしたので、助成金と、保護者からも少し出してもらっていました。あとは主催者の医師が出していました。人件費はボランティアが多く、スタッフも自給500円ほどでしたので、あまりかかっていませんでした。

田辺は色々な資源がありますが、機関同士が繋がりがすぎていると、合わなくて他の所へ行ったときに知られているのではないかと思う人もいます。それで行きづらいということもあるかなと思います。

田舎でひきこもった値打ちを、何らかの形で、仕事も含めて考えていけたら。自分たちの足元を見るためにも、色々教えていただけたらと思います。

(9) 田辺市ひきこもり相談窓口担当者感想

ひきこもり相談窓口で1年が過ぎて

ひきこもり相談窓口担当 松本 敦子

ひきこもり相談窓口になって早かったような、遅かったような、1年が過ぎました。

日々相談に携わりながら勉強していく毎日で、相談を通して相談者の方々や家族の方々には大変ご迷惑をおかけしたと思います。

私個人としては、コーディネーター的な相談が多かったので、このようにきちんと定期的に長期間相談を行うのは初めてに近く、個人と深く向き合うという相談経験でした。

自分に何が出来るのか、出来ているのか？多分何も出来ないなと感じながら毎日を過ごすのもここ数年ない経験でした。

自分を初心に返らせてくれる経験ですが1年たった今も暗中模索状態は何も変わってなく、相談者の皆様には申し訳ない限りです。

そんな毎日の中、ひきこもり検討委員の皆さんには影になり日向になり支えていただければ良かったです、ありがとうございます。

支えていただいたひきこもり検討委員会を通しては、ネットワークの大切さも教えていただきました、資源も多い旧田辺市内では団体の支援への協力は不可欠で、協力を頂くことによって支援に幅が生まれ充実します。

その協力を得る為には検討委員会のようなネットワークは欠かせない大切なものであるという事を痛感した1年でもありました。

少し大きくなって来年度を迎えたらと思います。

ひきこもり相談窓口を担当して

ひきこもり相談窓口 小川 香織

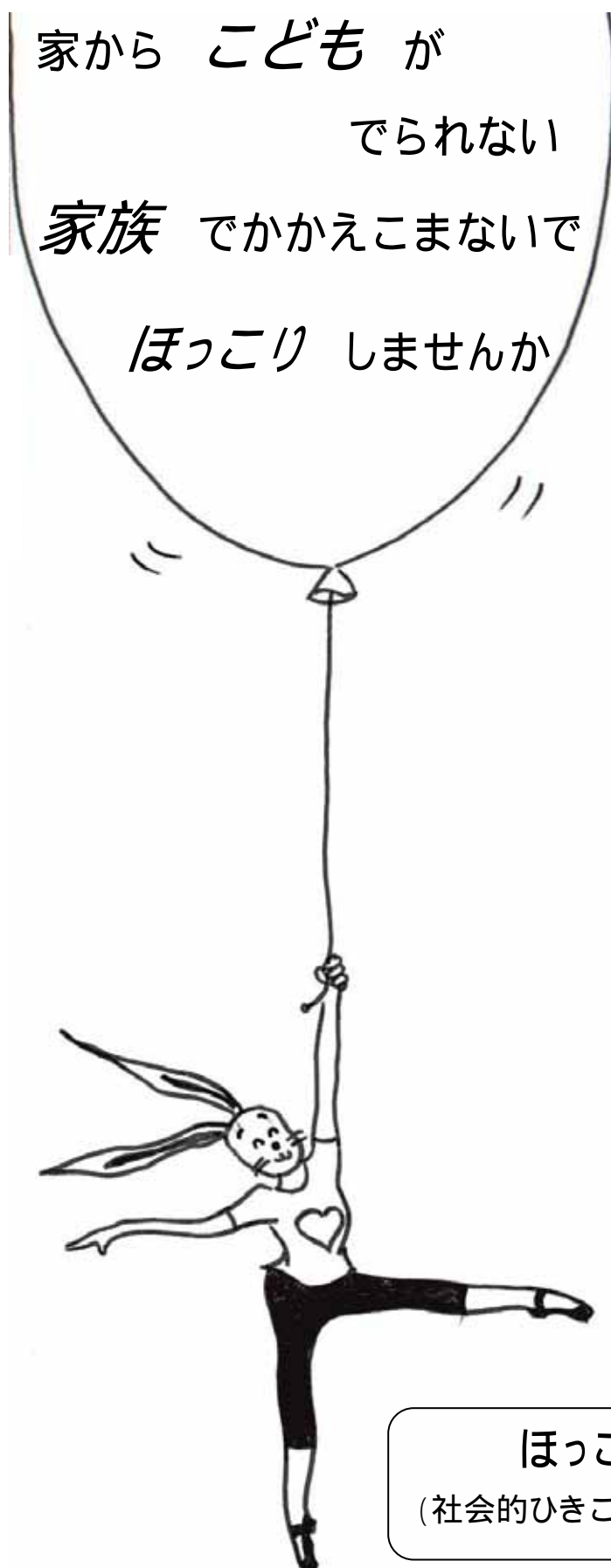
ひきこもり相談窓口を担当して、3年が経ちました。

今年度は、窓口担当者が変わり、体制も変わりました。南紀若者サポートステーションなどの周囲の支援機関も増え、変化のあった年でした。

改めて、この3年間を振り返ってみると、1年目、2年目は、自助会での関わりが中心でほんまもん体験などがあり、特に昨年度は外に出かけることも多くあり、自助会は、動きのあった年でした。今年の自助会は、昨年度参加していたメンバーに動きのあった方もあり、少しメンバーも変わりました。

2年目、少しこの支援について分かったような気がしていましたが、昨年度後半から今年度は、個別相談をさせていただく中で、また、自助会や家族会に参加させてもらう中で、この支援について、自助会、窓口の役割等について、改めて、何がより良い方向なのかについて、迷うことが多かった年でした。

講演会や研修会、ひきこもり検討小委員会に、オブザーバーで参加していただいた臨床心理士の方のお話を聞く中で、改めてこの支援についての勉強をさせていただきました。いろんな方の意見を聞かせてもらいながら、その時々、その方により良い支援の方法を、視点を変えて考えていくことが大切なのではないかと思いました。来年度は、他の機関とも連携しながら、自分自身も勉強しながら、相談に来られた人を良い方向に道案内出来れば良いと思っています。



ほっこり会
(社会的ひきこもり家族の会)

ひきこもり青年の居場所

NPO法人ハートツリー

Heart Tree House...

木々が地に根を生やし
枝の1本1本が広がり
豊かに実ることで
大きくなって
そんなふうにも育っていければ

利用対象

ひきこもり状態にある青年

対象年齢

15歳～30歳代までの男女

開所時間

月曜日～金曜日 13:00～17:00

見学・体験等を希望の方はご連絡下さい。

活動内容

相談活動・訪問活動

レクリエーション活動

自主製品作り(クッキー・ケーキ)

社会体験活動 など



since 2002

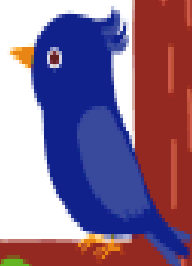
〒646-0032

和歌山県田辺市下屋敷町98番地

Tel & Fax 0739(25)8308

E-mail : heart-h@mb.aikis.or.jp

URL: <http://www.aikis.or.jp/~heart-h/>





南紀サポートステーションとは？

働きたいけど社会に出ることが不安な方、今の現状に様々な悩みを抱えていらっしゃる方の思いを受け止め、一緒に「はじめての一步」を踏み出せたらと考えております。
人の悩み、考えかたはその人によってさまざまです。「南紀若者サポートステーション」は、個人の思いを大切に、社会に向けてのサポートをいたします。

〒646-0031 和歌山県田辺市湊 1619-8 田辺市市民総合センター 北館
TEL 0739-25-2111 FAX 0739-25-0085

利用対象者は・・・

ニート・ひきこもり、学校からはなれた方、離職し長きに渡って就業されていない方。またその保護者、ご家族様。



こんな思いを抱えていませんか？

「働きたいけど何をしたらいいのかわからない」「働いていない期間が長いので就職できるか心配」「対人関係が苦手で就職活動がづらい」「子供がひきこもりぎみなので心配」「とにかく不安感でいっぱいだ」

キャリアカウンセリング(要予約)



キャリアカウンセリング(要予約)

10:00～18:00

日・祝は休館です。

まずはお気軽にお電話下さい。

臨床心理士の相談もあります。(要予約)

お問合せ

電話：0739-25-2111 FAX 0739-25-0085

メール：nanki-saposute@ec2.technowave.ne.jp

相談は無料です！

NPO 法人 かたつむりの会

- ・ 街づくり、若者支援、環境保護をキーワードに活動しています。
- ・ 田辺市上屋敷二丁目に、「町家カフェ、上屋敷二丁目」をオープンしています。



手作り石釜

- ・ 地域のコミュニティ空間として、また 若者の就労支援の場として機能出来たらと思っています。

この看板が目印です。
白神山地の天然酵母菌
や国産小麦を使ったパン
やピザなど、食材にこだわったメニューです。



〒 646-0036

和歌山県田辺市上屋敷二丁目 6-31 番地

TEL0739-20-5595 FAX0739-20-5585

田辺市ひきこもり検討委員会【設置要綱】

(設置)

第1条 思春期・青年期にある者(以下「青少年」という。)にみられる「ひきこもり」の問題について、関係機関が相互に連携して一体となって取り組むことを目的として、田辺市「ひきこもり」検討委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(検討事項)

第2条 委員会は、前条に規定する目的を達成するため、次に掲げる事項について検討等を行う。

- (1)「ひきこもり」の状態にある青少年についての支援活動に関すること。
- (2)前号に規定する青少年に関する問題点等について検討すること。
- (3)「ひきこもり」の予防活動に関すること。
- (4)「ひきこもり」に関する研修や研究会に関すること。
- (5)前各号に掲げるもののほか、委員会の目的達成のために必要な事項に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、委員42名以内で組織する。

2 委員は次に掲げる関係機関の職員のうちから、市長が委嘱し、又は任命する。

- (1) 社会福祉法人やおき福祉会
- (2) 社会福祉法人ふたば福祉会
- (3) 民間支援団体
- (4) 紀南こころの医療センター
- (5) 南紀福祉センター
- (6) 田辺保健所
- (7) 紀南児童相談所
- (8) 田辺市教育研究所
- (9) 主任児童委員
- (10) 田辺市母子保健推進委員会
- (11) 知識経験者
- (12) 紀南六校代表
- (13) 南部高校 龍神分校
- (14) ひきこもり家族会代表
- (15) 当事者代表
- (16) 保健福祉部長
- (17) 子育て推進課
- (18) 障害福祉室
- (19) 商工振興課

(20) 学校教育課(幼稚園・小・中学校関係)

(21) 生涯学習課

(23) 健康増進課

- 3 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員会)

第4条 委員会に委員長及び副委員長2名を置き、委員の互選によりこれを定める。

2 委員長は、会務を総理する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

2 委員会は、委員会の委員の代表による小委員会を設置し、定期的に会議を開き、その結果は委員会へ報告する。

3 委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の者の意見又は説明を聴くため、その者に委員会への出席又は文書の提出を求めることができる。

(事務局)

第6条 委員会の事務局は、保健福祉部健康増進課に置く。

(その他)

第7条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成17年5月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成20年4月1日から施行する。

田辺市ひきこもり検討委員会【平成20年度 委員構成】

		選出区分	備考(選出団体、役職名)
委員長	1	学識経験者	
副委員長	2	社会福祉法人ふたば福祉会	社会福祉法人ふたば福祉会
副委員長	3	民間支援団体	ハートツリー
小委員	4	社会福祉法人やおき福祉会	紀南障害者就業・生活センター
小委員	5	社会福祉法人ふたば福祉会	社会福祉法人ふたば福祉会
小委員	6	南紀福祉センター	医師
小委員	7	田辺保健所	精神保健福祉相談員
小委員	8	学識経験者	
小委員	9	学校教育課	田辺市
小委員	10	生涯学習課	田辺市
小委員	11	健康増進課	田辺市 ひきこもり相談窓口担当
	12	民間支援団体	絆
	13	紀南こころの医療センター	医師
	14	紀南こころの医療センター	精神保健福祉相談員
	15	紀南児童相談所	
	16	田辺市教育研究所	教育相談担当
	17	主任児童委員	
	18	田辺市母子保健推進員	
	19	学識経験者	龍神行政局 民生児童委員協議会会長
	20	学識経験者	龍神行政局
	21	学識経験者	大塔行政局
	22	学識経験者	大塔行政局 民生児童委員
	23	学識経験者	中辺路行政局 民生児童委員
	24	学識経験者	中辺路行政局
	25	学識経験者	本宮行政局
	26	学識経験者	本宮行政局
	27	紀南六高校代表	田辺高等学校
	28	南部高等学校龍神分校	南部高校龍神分校
	29	家族会	ほっこり会
	30	当事者	ひきこもり自助会 知音
	31	子育て推進課	田辺市
	32	障害福祉室	田辺市
	33	商工振興課	田辺市
	34	生涯学習課	田辺市
	35	保健福祉部長	田辺市